

第4章 理化学的分析

熱残留磁気測定

〔窯跡の考古地磁気年代推定〕

藤根 久・Lomtatidze Zaur (パレオ・ラボ)

1. はじめに

コング窯跡や穂屋1号窯跡および穂屋2号窯跡は、大分県中津市伊藤田に所在する丘陵斜面の須恵器窯跡である。各窯跡の操業時期は、コング窯跡が8世紀前半、穂屋1号窯跡が7世紀前半、穂屋2号窯跡が7世紀後半と考えられている。

ここでは、これら須恵器窯跡の床面焼土の熱残留磁化を測定し、その磁化方向から窯跡の焼成年代を推定した。なお、一部の窯跡から出土した炭化材についてAMS法による放射性炭素年代測定を行っている（放射性炭素年代測定を参照）。

2. 考古地磁気年代推定の原理

地球上には地磁気が存在するために、磁石は北を指す。この地磁気は、その方向と強度（全磁力）によって表される。方向は、真北からの角度である偏角（Declination）と水平面からの角度である伏角（Inclination）によって表す。磁気コンパスが北として示す方向（磁北）は、真北からずれており、この間の角度が偏角である。また、磁針をその重心で支え磁南北と平行な鉛直面内で自由に回転できるようにすると、北半球では磁針のN極が水平面より下方を指す。この時の傾斜角が伏角である。現在、この付近の偏角は約 6.45° 、伏角は約 47.36° 、全磁力（水平分力）は約 32024.6 (nT) である（理科年表、2006；いずれも2000年値）。これら地磁気の三要素（偏角・伏角・全磁力）は、観測する地点によって異なった値になる。全世界地磁気三要素の観測データの解析から、現在の地磁気の分布は、地球の中心に棒磁石を置いた時にできる磁場分布に近似される。また、こうした地磁気は時間の経過とともに変化し、ある地点で観測される偏角や伏角あるいは全磁力の値も時代とともに変化する。この地磁気の変動を地磁気永年変化と呼んでいる。

過去の地磁気の様子は、高温に焼かれた窯跡や炉跡などの焼土、地表近くで高温から固結した火山岩あるいは堆積物などの残留磁化測定から知ることができる。大半の物質は、ある磁場中に置かれると磁気を帯びるが、強磁性鉱物（磁鉄鉱など）はこの磁場が取り除かれた後でも磁気が残る。これが残留磁化である。考古地磁気では、焼土の残留磁化（熱残留磁化）が、焼かれた当時の地磁気の方角を記録していることを利用する。こうした地磁気の化石を調べた結果、地磁気の方角は少しずつ変化しており、その変化は地域によって違っていることが分かっている。過去2,000年については、西南日本の窯跡や炉跡の焼土の熱残留磁化測定から、その変化が詳しく調べられている（広岡、1977、Shibuya、1980）。一方、地磁気には地域差が認められることから、東海地方における地磁気永年変化曲線が求められている（広岡・藤澤、2002）。

こうした年代のよく分かっている窯跡焼土や火山岩の熱残留磁化測定などから地磁気永年変化曲線が得られると、逆に年代の確かでない遺跡焼土などの残留磁化測定を行い、先の地磁気永年変化曲線と比較することによって、その焼成時の年代が推定できる。また、年代が推定されている窯跡焼土などについても、土器とは違った方法で焼成時の年代を推定できることから、さらに科学的な裏付けを得ることができる。この年代推定法が考古地磁気による年代推定法である。ただし、この方法は、 ^{14}C 年代測定法などのように、測定結果単独で年代を決定する方法ではない。すなわち、焼土の熱残留磁化測定から得られる偏角および伏角の値からは複数の年代値が推定されるが、いずれを採用するかは、焼き物等の年代が参考となる。

3. 試料採取と残留磁化測定

考古地磁気による年代推定は、a) 測定用試料の採取および整形、b) 残留磁化測定および統計計算を行い、

熱残留磁気測定

c) 地磁気永年変化曲線との比較を行い、焼成年代を推定する。なお、試料の磁化保持力や焼成以後の二次的な残留磁化の有無などを確認するために、段階交流消磁を行った。

a. 測定用試料の採取および整形

試料は、床焼土面において、①一辺約4 cmの立方体試料を取り出すため、瓦用ハンマーなどを用いて、対象とする部分（良く焼けた部分）の周囲に溝を掘る。②薄く溶いた石膏を試料全体にかけ、試料表面を補強する。③やや固め（練りハミガキ程度）の石膏を試料上面にかけ、すばやく一辺5 cmの正方形のアルミ板を押し付け、石膏が固まるまで放置する。④石膏が固まった後、アルミ板を剥し、この面の最大傾斜の方位および傾斜角を磁気コンパス（考古地磁気用に改良したクリノメータ）で測定し、方位を記録すると同時に、この面に方位を示すマークと番号を記入する。⑤試料を掘り起こした後、試料の底面に石膏をつけて補強し持ち帰る。⑥持ち帰った試料は、ダイヤモンド・カッターを用いて一辺3.5 cm・厚さ2 cm程度の立方体に切断する。この際切断面が崩れないように、一面ごとに石膏を塗って補強し、熱残留磁化測定用試料とする。採取した試料は、コング窯跡が12試料、穂屋1号窯跡および穂屋2号窯跡が14試料である。

b. 段階交流消磁、熱残留磁化測定および統計計算の結果

熱残留磁化測定は、リング・コア型スピナー磁力計（SMM-85：(株)夏原技研製）を用いて測定した。磁化保持力の様子や放棄された後の二次的な磁化の有無を確認するため、任意1試料（伊藤田窯跡がNo.6、伊藤田穂屋窯跡がNo.2、伊藤田2号窯跡がNo.3）について交流消磁装置（DEM-8601：(株)夏原技研製）を用いて段階的に消磁を行い、その都度スピナー磁力計を用いて残留磁化を測定した。その結果、試料の磁化強度は 10^{-2} ～ 10^{-3} emuと強いことが分かった。さらに、磁化方向は、両者とも中心に向かって直線的に変化し、安定した方向を記録していることが分かった。

以上の理由から、150 Oeで消磁した際の残留磁化方向が焼成時の磁化方向であると判断した。そこで、これ以外の段階交流消磁を行っていない試料も、150 Oe消磁した後に残留磁化を測定した。

複数試料の測定から得た偏角（ D_i ）、伏角（ I_i ）を用いて、Fisher（1953）の統計法により平均値（ D_m 、 I_m ）を求めた。信頼度数は、コング窯跡が1422.45、穂屋1号窯跡が898.19、穂屋2号窯跡が1790.85といずれも高い値であり、従って伏角および偏角の各誤差は小さい値となった（表1）。

各残留磁化方向は、真北を基準とする座標に対する数値に補正した。偏角は、建設省国土地理院の1990.0年の磁気偏角近似式から計算した $6.45^\circ W$ を使用した。その結果は、広岡（1977）による地磁気永年変化曲線とともにプロットした。図中測定点に示した楕円は、フッシャー（1953）の95%信頼角より算定した偏角および伏角の各誤差から作成したものである。

表1 窯跡床面焼土の残留磁化測定結果 (偏角補正前)

遺構名	試料No	偏角(° E)	伏角(°)	強度(x10 ⁻³ emu)	備考	統計処理項目	統計値
①コング窯跡 (須恵器窯) (150 Oe消磁)	1	1.9	47.8	20.61		試料数 (n)	12
	2	-3.2	47.4	16.84		平均偏角 Dm (° E)	-3.99
	3	-4.5	49.5	22.71			
	4	-3.1	48.1	14.23		平均伏角 Im (°)	47.47
	5	-5.3	47.9	15.04			
	6	-7.0	47.0	20.07	段階交流消磁	誤差角 δ D (°)	1.70
	7	-4.8	47.1	9.53			
	8	-4.1	44.6	20.05		誤差角 δ I (°)	1.15
	9	-1.7	46.1	27.23			
	10	-3.3	48.3	8.36		信頼度計数 (k)	1422.45
	11	-4.4	46.9	27.86			
	12	-8.4	48.6	24.38		平均磁化強度 (x10 ⁻³ emu)	18.91
	13						
	14						
②穂屋1号窯跡 (150 Oe消磁)	1	-3.3	61.7	14.00		試料数 (n)	14
	2	-16.6	60.6	10.09	段階交流消磁	平均偏角 Dm (° E)	-11.71
	3	-9.1	60.9	8.26			
	4	-9.2	60.6	5.59		平均伏角 Im (°)	60.35
	5	-5.6	61.7	18.87			
	6	-10.7	63.3	6.25		誤差角 δ D (°)	2.69
	7	-8.6	59.7	20.51			
	8	-16.5	59.2	9.91		誤差角 δ I (°)	1.33
	9	-13.7	58.5	6.64			
	10	-8.4	62.0	7.81		信頼度計数 (k)	898.19
	11	-19.4	58.9	5.82			
	12	-15.8	58.9	4.90		平均磁化強度 (x10 ⁻³ emu)	9.29
	13	-12.5	58.7	8.45			
	14	-12.8	59.2	3.02			
③穂屋2号窯跡 (150 Oe消磁)	1	-8.4	57.7	110.20		試料数 (n)	14
	2	-6.5	58.7	92.43		平均偏角 Dm (° E)	-6.66
	3	-6.8	56.9	50.83	段階交流消磁		
	4	-6.7	59.3	73.09		平均伏角 Im (°)	58.96
	5	-7.2	61.3	68.99			
	6	-3.7	58.4	70.09		誤差角 δ D (°)	1.82
	7	-10.2	58.9	47.91			
	8	-11.4	58.6	57.94		誤差角 δ I (°)	0.94
	9	-7.0	59.7	72.13			
	10	-9.1	57.7	77.73		信頼度計数 (k)	1790.85
	11	-4.3	58.7	77.65			
	12	-2.4	58.0	11.73		平均磁化強度 (x10 ⁻³ emu)	69.05
	13	-7.6	60.5	73.57			
	14	-1.7	60.7	82.41			

4. 焼成年代値の推定

第40図には、広岡(1977)による地磁気永年変化曲線の一部とともに各窯跡床面焼土の磁化方向を示した。窯跡の磁化方向は、標準曲線のAD500~1,100年間、AD600-700年間にプロットされた。年代の推定は、磁化方向の中心にもっとも近い標準曲線上に移動して推定した(表2)。

その結果、コング窯跡がAD670-685年、AD785-840年、AD945-1,005年と推定された。また、穂屋1号窯跡がAD630-680年と推定された。さらに、穂屋2号窯跡がAD 650-680年と推定された。

なお、コング窯跡から出土した炭化材②(アカガシ亜属)の放射性炭素年代測定では、1σ暦年代範囲において668-709 calAD (46.2%)、747-766 calAD (22.0%)であり、7世紀後半~8世紀初頭または8世紀中頃~8世紀後半の年代範囲を示す。なお、炭化材①(マツ属複雑管束亜属)のウィグルマッチングでは、1,742-1,771 calAD (52.2%)、1,935-1,944 calAD (16.0%)であり、後の時代の炭化材が混入した可能性が高い。

穂屋2号窯跡の天井土中のスサ材の放射性炭素年代測定では、1σ暦年代範囲において1,174-1,225 calAD (68.2%)であった。この年代値は、考古遺物による年代や残留磁化による推定年代よりも新しい年代であった。試料は未炭化のスサであったこと、炭素含有量が極端に低いことから、植物根などの新しい炭素の影響によるものと考えられる。

表2 各窯跡の焼成年代推定値

遺構	遺物による年代	残留磁化測定による推定年代
①コング窯跡 (須恵器窯跡)	8世紀前半	AD 670-685年, AD 785-840年, AD 945-1005年
②穂屋1号窯跡 (須恵器窯跡)	7世紀前半	AD 630-680年
③穂屋2号窯跡 (須恵器窯跡)	7世紀後半	AD 650-680年

引用文献

Fisher, R.A. (1953) Dispersion on a sphere. Proc. Roy. Soc. London, A, 217, 295-305.

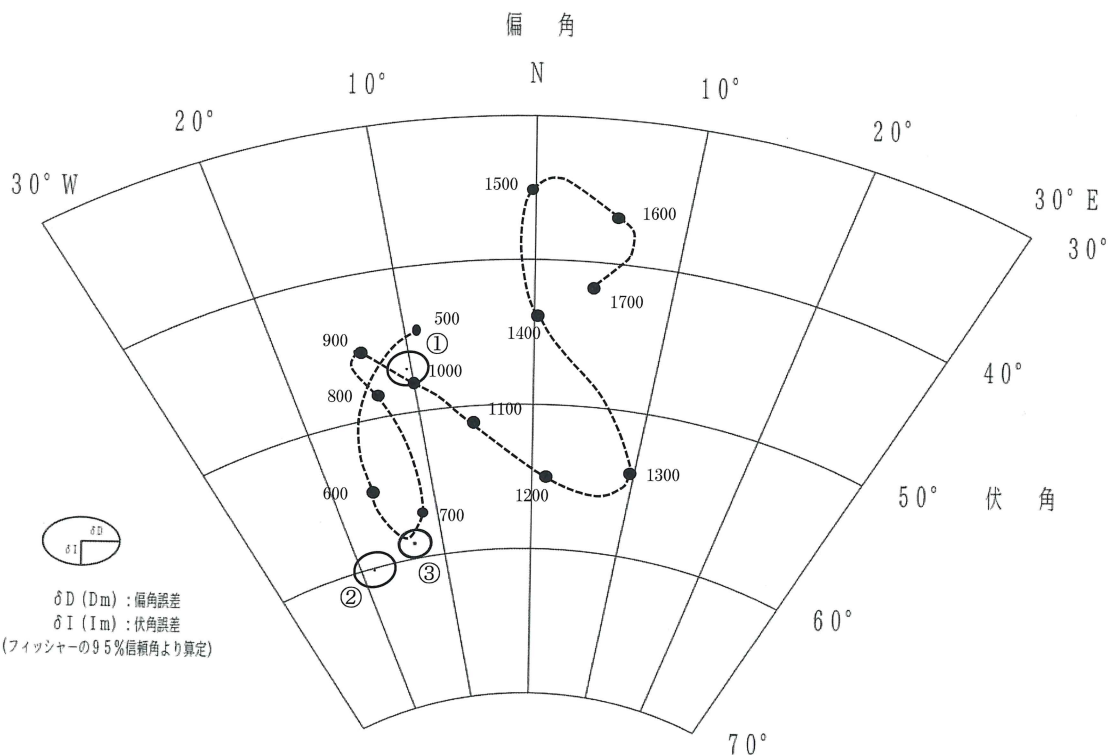
広岡公夫 (1977) 考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向. 第四紀研究, 15, 200-203.

広岡公夫・藤澤良祐 (2002) 東海地方の地磁気永年変化曲線. 考古学と自然科学, 45, 29-54.

理科年表 (2006) 国立天文台編, 丸善, 1030p.

Shibuya, H. (1980) Geomagnetic secular variation in Southwest Japan for the past 2,000 years by means of archaeomagnetism.

大阪大学基礎工学部修士論文, 54p.



第40図 広岡 (1977) による地磁気永年変化曲線 (一部) と窯跡焼土の残留磁化方向

①: コング窯跡、②: 穂屋1号窯跡、③: 穂屋2号窯跡

〔窯跡出土炭化材およびスサ材の放射性炭素年代測定〕

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

伊藤茂・尾寄大真・丹生越子・廣田正史・小林紘一

Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・藤根 久

1. はじめに

コング窯跡および穂屋2号窯跡は、大分県中津市伊藤田に所在する丘陵斜面の須恵器窯跡である。各窯跡の操業時期は、コング窯跡が8世紀前半、穂屋2号窯跡が7世紀後半と考えられている。

ここでは、コング窯跡から出土した炭化材、穂屋2号窯跡の窯天井土中のスサ材について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。なお、コング窯跡から出土した炭化材の1試料は、ウィグルマッピングを行った。試料の切り分けは藤根が行い、報告書は藤根と伊藤が担当した。

2. 試料と方法

コング窯跡から出土した炭化材①(マツ属複雑管束亜属)は、ウィグルマッピングを行い、炭化材②は、最外-3年輪分を測定した(表4)。ウィグルマッピングを行った炭化材①は、実体顕微鏡を用いて最外年輪を確認した後、5年輪単位で切り分けた。また、穂屋2号窯跡の窯天井土中のスサ材は、天井土を手割りして、ピンセットを用いてスサ材を抽出した。

各試料は、調製した後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS: NEC製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

表3 測定試料及び処理(1)

測定番号	遺構データ	試料の詳細	前処理
PLD-11870	遺跡名: コング窯跡 試料の種類: 炭化材① 試料の性状: マツ属複雑管束亜属 (半径25mm)	最外-5年輪	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.2N, 塩酸: 1.2N) サルフィックス
PLD-11871		6-10年輪	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.2N, 塩酸: 1.2N) サルフィックス
PLD-11872		11-15年輪	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.2N, 塩酸: 1.2N) サルフィックス
PLD-11873		16-20年輪	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.2N, 塩酸: 1.2N) サルフィックス

表4 測定試料及び処理(2)

測定番号	遺構データ	試料の詳細	前処理
PLD-12242	遺跡名: コング窯跡 試料の種類: 炭化材② 試料の性状: アカガシ亜属	最外-3年輪 (半径10mm)	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1N, 塩酸: 1.2N) サルフィックス
PLD-12862	遺跡名: 穂屋2号窯跡 試料の種類: 天井土中のスサ材 試料の性状: 未炭化試料	状態: 乾燥	酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 0.1N, 塩酸: 1.2N) サルフィックス

3. 結果

コング窯跡から出土した炭化材①についてウィグルマッピングを行った結果を表5に示した。また、コング窯跡から出土した炭化材②と穂屋2号窯跡の窯天井土中のスサ材について、¹⁴C年代を暦年代に較正した結果を表6に示した。

なお、暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代(yrBP)の算出には、¹⁴Cの半減期

熱残留磁気測定

としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差(±1σ)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正、ウィグルマッチング法の詳細は以下のとおりである。

[暦年較正]

大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い(¹⁴Cの半減期5730±40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal4.1(較正曲線データ:INTCAL04)を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表5 コング窯跡出土炭化材の暦年較正およびウィグルマッチングの結果

測定番号	δ ¹³ C (%)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	¹⁴ C年代 (yrBP±1σ)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-11870	-26.22±0.13	164±21	165±20	1674AD(8.1%)1682AD 1735AD(42.6%)1777AD 1799AD(6.2%)1806AD 1930AD(11.3%)1942AD	1665AD(17.0%)1696AD 1726AD(44.9%)1785AD 1795AD(10.5%)1814AD 1917AD(19.3%)1954AD
PLD-11871	-27.39±0.17	156±23	155±25	1670AD(12.5%)1691AD 1729AD(35.5%)1779AD 1799AD(7.9%)1810AD 1925AD(12.3%)1943AD	1666AD(16.2%)1700AD 1721AD(39.0%)1785AD 1795AD(10.8%)1819AD 1832AD(10.9%)1880AD 1915AD(18.6%)1953AD
PLD-11872	-28.56±0.15	151±23	150±25	1675AD(11.1%)1693AD 1728AD(33.6%)1778AD 1799AD(8.5%)1812AD 1920AD(15.0%)1942AD	1666AD(16.2%)1706AD 1720AD(35.8%)1784AD 1796AD(10.9%)1819AD 1832AD(14.5%)1882AD 1915AD(18.0%)1950AD
PLD-11873	-27.65±0.14	145±22	145±20	1678AD(10.4%)1695AD 1727AD(24.0%)1765AD 1800AD(8.5%)1813AD 1853AD(6.8%)1868AD 1918AD(14.7%)1940AD	1668AD(16.0%)1707AD 1720AD(31.4%)1781AD 1797AD(11.5%)1826AD 1832AD(19.3%)1884AD 1914AD(17.1%)1945AD
最外試料年代				1742AD(52.2%)1771AD 1935AD(16.0%)1944AD	1685AD(1.8%)1691AD 1736AD(67.6%)1783AD 1930AD(25.9%)1950AD

表6 コング窯跡出土炭化材および穂屋2号窯跡出土スサ材の放射性炭素年代測定、暦年較正

測定番号	δ ¹³ C (%)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	¹⁴ C年代 (yrBP±1σ)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-12242	-25.49±0.27	1301±24	1300±25	668AD(46.2%)709AD 747AD(22.0%)766AD	661AD(63.3%)728AD 736AD(32.1%)772AD
PLD-12862	-25.97±0.18	836±21	835±20	1174AD(68.2%)1225AD	1166AD(95.4%)1256AD

[ウィグルマッチング法]

試料の年代を得る上での問題は¹⁴C年代値から暦年較正を行う際に較正曲線に凹凸があるため単一の測定値から高精度の年代を決定するのが難しいという点である。ウィグルマッチング法では複数の試料を測定し、それぞれの試料間の年代差の情報を用いて試料の年代パターンと、較正曲線のパターンが最も一致する年代値を算出することによって高精度で信頼性のある年代値を求めることができる。

測定では、得られた年輪数が確認できる木材について、1年毎或いは数年分をまとめた年輪を数点用意し、それぞれ年代測定を行う。個々の¹⁴C年代値から暦年較正を行い、得られた確率分布を年輪幅だけずらしてすべてを足し合わせるにより最外年輪の確率分布を算出する。この確率分布より年代範囲を求める。

4. 考察

コング窯跡から出土した炭化材②（アカガシ亜属）の放射性炭素年代測定では、 1σ 暦年代範囲において668–709 calAD (46.2%)、747–766 calAD (22.0%) であり、7世紀後半～8世紀初頭または8世紀中頃～8世紀後半の年代範囲を示す。なお、コング窯跡から出土した炭化材①（マツ属幅維管束亜属）のウィグルマッチングでは、1,742–1,771 calAD (52.2%)、1,935–1,944 calAD (16.0%) であり、後の時代の炭化材が混入していたことを示す。

穂屋2号窯跡の天井土中のスサ材の放射性炭素年代測定では、 1σ 暦年代範囲において1,174–1,225 calAD (68.2%) であった。この年代値は、考古遺物による年代や残留磁化による推定年代よりも新しい年代であった。試料は未炭化のスサであったこと、炭素含有量が極端に低いことから、植物根など新しい炭素の影響によるものと考えられる。

参考文献

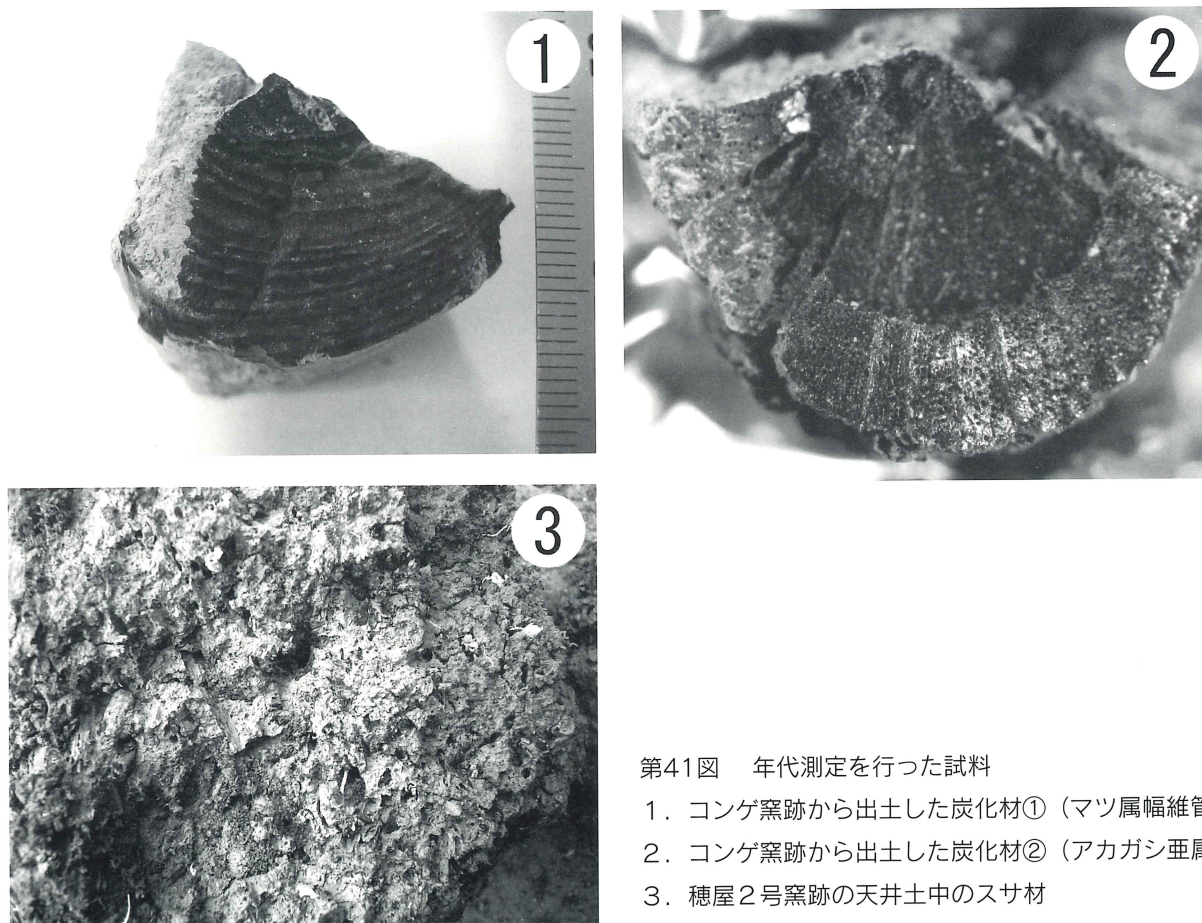
Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425–430.

Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355–363.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代, 3–20.

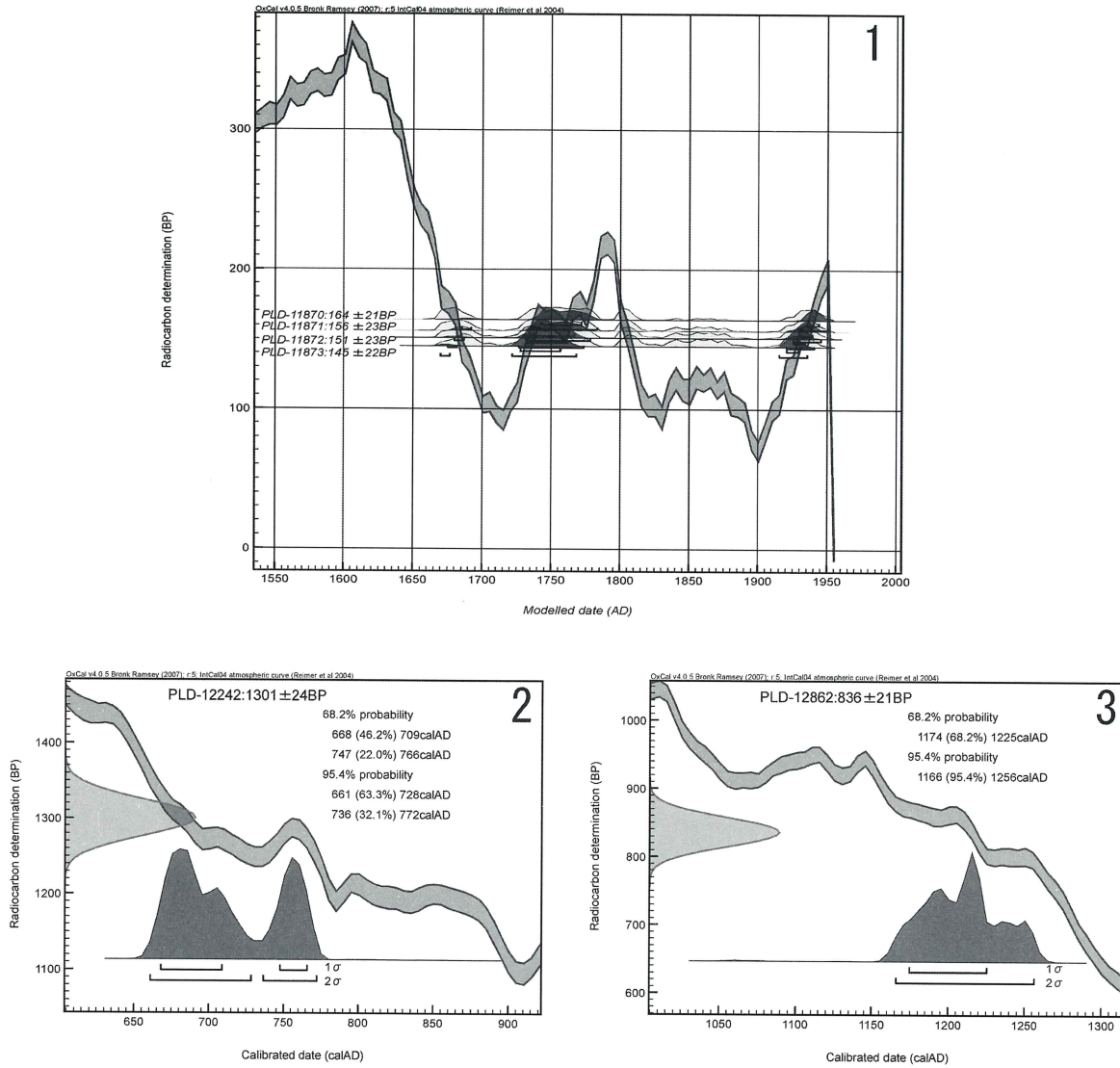
Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmele, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer,

C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0–26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029–1058.



第41図 年代測定を行った試料

1. コング窯跡から出土した炭化材①（マツ属幅維管束亜属）
2. コング窯跡から出土した炭化材②（アカガシ亜属）
3. 穂屋2号窯跡の天井土中のスサ材



第42図 ウィグルマッチング図および暦年較正図

1. コング窯跡から出土した炭化材①のウィグルマッチング図
2. コング窯跡から出土した炭化材②の暦年較正図
3. 穂屋2号窯跡の天井土中のスサ材の暦年較正図

第5章 総括

第1節 窯跡の構造

今回調査した3基の窯構造については、県内の須恵器窯跡を概観する中で規模、平面形、床面傾斜などに着目し説明するものである。調査例は当然ながら伊藤田窯跡群中の窯跡が多いが、宇佐市柚木窯跡や大分市松岡古窯跡群などの調査例もあり、触れてみたい。対象の時期は、これまでの調査の実例により、6世紀後半～8世紀の後半とした。

〔6世紀後半〕

瓦ヶ迫窯跡は伊藤田窯跡群で現在最も古い時期の窯である。半地下式無階無段登窯の構造をもつ。煙道付近を削平されているが、現存長11.6m、最大幅1.7mと長大である。平面形は燃焼部から焼成部まで幅が変化しない寸胴形である。床面傾斜は焼成部が20度と、燃焼部の16度より明らかに強い。顕著な床の張替えがみられたが、焼成部にはほとんど構築当初の床面を使っており、補修回数2回を超えるものではないと思われる。燃焼部から焚口にかけて船底状のピットはない。灰原は主軸方向13m、裾部（対象が限定される）30m、厚さ0.1m～0.4mの規模で確認されていた。宇佐市桐ヶ迫窯跡は出土遺物からこの時期にあてられるが、灰原のみで窯本体は未調査である（注1）。

〔6世紀末頃〕

この時期は草場窯跡が唯一の調査例であり、伊藤田窯跡群で瓦ヶ迫窯跡に後続する。半地下式無階無段登窯の構造をもつ。煙道付近を僅かに削平されているが、現存長10.3m、最大幅は焼成部で中央にもち1.4mとやや狭く瓦ヶ迫窯跡よりもやや小型となる。平面形は焚口から焼成部に向かって緩く広がる形態ではあるが、焼成部の幅はほぼ1.3mと顕著な大きな変化ではなく寸胴に近い。床面傾斜は焼成部で14度～15度、燃焼部はほぼ平坦であった。燃焼部から焚口にかけて船底状のピットがみられる。貼替えを伴うⅢ次の床が確認されている。灰原は主軸方向13m、裾部（対象が限定される）13m、厚さ0.2m～0.3mの規模で確認されていた。

〔7世紀前半〕

城山窯跡群A地区1号窯跡は、焚口付近を僅かに削平されているが残存状態は良好といえる。半地下式無階無段登窯の構造をもつ。現存長9.81m、最大幅は焼成部やや焚口寄りに1.3mである。

平面形に変化がみられる。窯尻から焼成部にかけて膨らみ、さらに焚口に向かい絞られ、緩い胴張り型をなす。床面は焼成部で29度と強い傾斜をもつ。燃焼部から焚口にかけて船底状のピットをもつ。B地区2号窯は推定全長4mの半地下無階無段の小型窯と想定されているが、焼成部の大半を欠くため不明といわざるを得ない。窯内からこの時期の一括資料が得られている。

穂屋1号窯跡は焚口と燃焼部を欠くが、現存長4.7mの半地下式無階無段登窯である。遺存状態は不良であるが、煙道に向かってやや細くなる平面形が想定される。床面傾斜は焼成部の残存部で23度であった。灰原は南北17.5m、東西8mの範囲に窯主軸を中心に半円形を描く形状で形成され、窯1基の操業と対応すると想定している。灰原の厚さは0.2m程度と薄く、小規模・短期間の操業と考えられる。

夜鳴池窯跡は灰原出土須恵器からこの時期の操業と考えられる。焚口を含む燃焼部の一部を残すのみで、窯構造は不明であるが、同一時期の例として示しておきたい。

〔7世紀後半〕

穂屋2号窯跡は焚口～燃焼部及び煙道の先端を欠くため、全体の構造は明らかでないが、現存長6.5mの半地下式無階無段登窯の構造をもつ須恵器窯跡である。焼成部、煙道付近は残っており、平面形は煙道に向かってやや細くなる緩いハの字状をなす。焼成部にⅢ次にわたる改造がみられた。床面傾斜は構築当初のⅠ次床が22度、Ⅱ次床20度、最終段階のⅢ次床が18度と嵩上げが進むにつれて傾斜が緩くなっていた。復元全長は9mを超えないものと想定され、前代よりも小型化する。

穂屋2号窯跡南東の谷奥部には穂屋池と呼ばれる貯水池が造られており、東西の両岸には複数の窯跡が確認さ

第1節 窯跡の構造

れている。このうち東岸は7世紀後半～8世紀初頭頃の須恵器が散布し、3基の須恵器窯跡が想定されている。窯構造は未調査のため、不明であるが当該期の窯として示しておきたい。(注2)。

[8世紀前半]

コング窯跡は煙道の先端付近と焚口を欠失していたが、半地下式無階無段登窯の構造をもつ。規模は現存長6.3m、最大幅は1.4mで焚口に向かい絞られる細長い寸胴型を呈す。平面形に大きな変化がみられないが、規模は確実に小型化している。床面の補修状況から操業期間も短期間と思われ1窯の生産量は少ないと考えられる。供膳形態の杯・皿類に限られる。甕の破片が焼台で使用されており、焼成品の焼き分けがみられる。床面の傾斜は燃焼部で5度、焼成部で19度、煙道は焼成部から49度と一旦急な傾斜で立ち上がった後、27度の傾斜で外に至る。

[8世紀中頃～後半]

大分市の松岡古窯跡群は県内では最も南に位置し、4基調査されている(注3)。長さ7mを超える例はなく、最大幅1.1m～1.5m、床面傾斜20度～37度と急傾斜である。半地下式無階無段登窯の構造をもつ。ハの字状に開く形態は共通する。宇佐市柚木窯跡は短脚高環を主体に焼成されており、この時期の操業が考えられている(注4)。宇佐市内では虚空蔵寺の供給瓦窯であった虚空蔵寺窯跡群中のうち、3号瓦窯跡が瓦窯から須恵器窯に改造され8世紀後半に操業した例として知られている。

窯の平面形は、伊藤田窯跡群に限られるが6世紀代は寸胴型が典型的であり、規模は10m～11mと大型である。7世紀前半から平面形に変化がみられ、胴張り型やハの字型が現れる。8世紀前半には寸胴に近い逆ハ字状が出現する。8世紀後半には松岡例のみであるがハの字状で小型化が顕著となり、一定の期間の中で複数窯の操業がみられる。単独の場合、コング窯跡のように操業期間は短期間と考えられる。これまで調査された須恵器窯はすべて半地下無階無段登窯である。

大分県での須恵器窯跡調査例は少数であり、窯構造の変遷を辿ることは難しく、事例の多い地域の傾向に偏った恐れもある。僅少な例で窯構造を概観したものである。

伊藤田窯跡群の特徴の一つとして、6世紀後半から8世紀前半までにいたる須恵器の連続的な生産活動がみられる点である。古墳時代から歴史時代の長期にわたる継続的な須恵器生産が一地域で展開してことである。むろん、歴史時代の生産については需要と供給の関係において前代とは異なる質的な違いが存在すると思われる。出土須恵器のうち特に陶硯に注目したい。7世紀前半期の城山窯跡群の灰原から2点、7世紀後半の穂屋2号窯跡から2点と7世紀代に確実にみられることは、生産の継続性あるいは窯業の好適地の継続的利用の要因として官営的要素が想定される。さらに穂屋1・2号窯跡の南東部穂屋池西岸の窯跡では瓦窯が存在するなど窯業生産の中心地であったことが窺える。

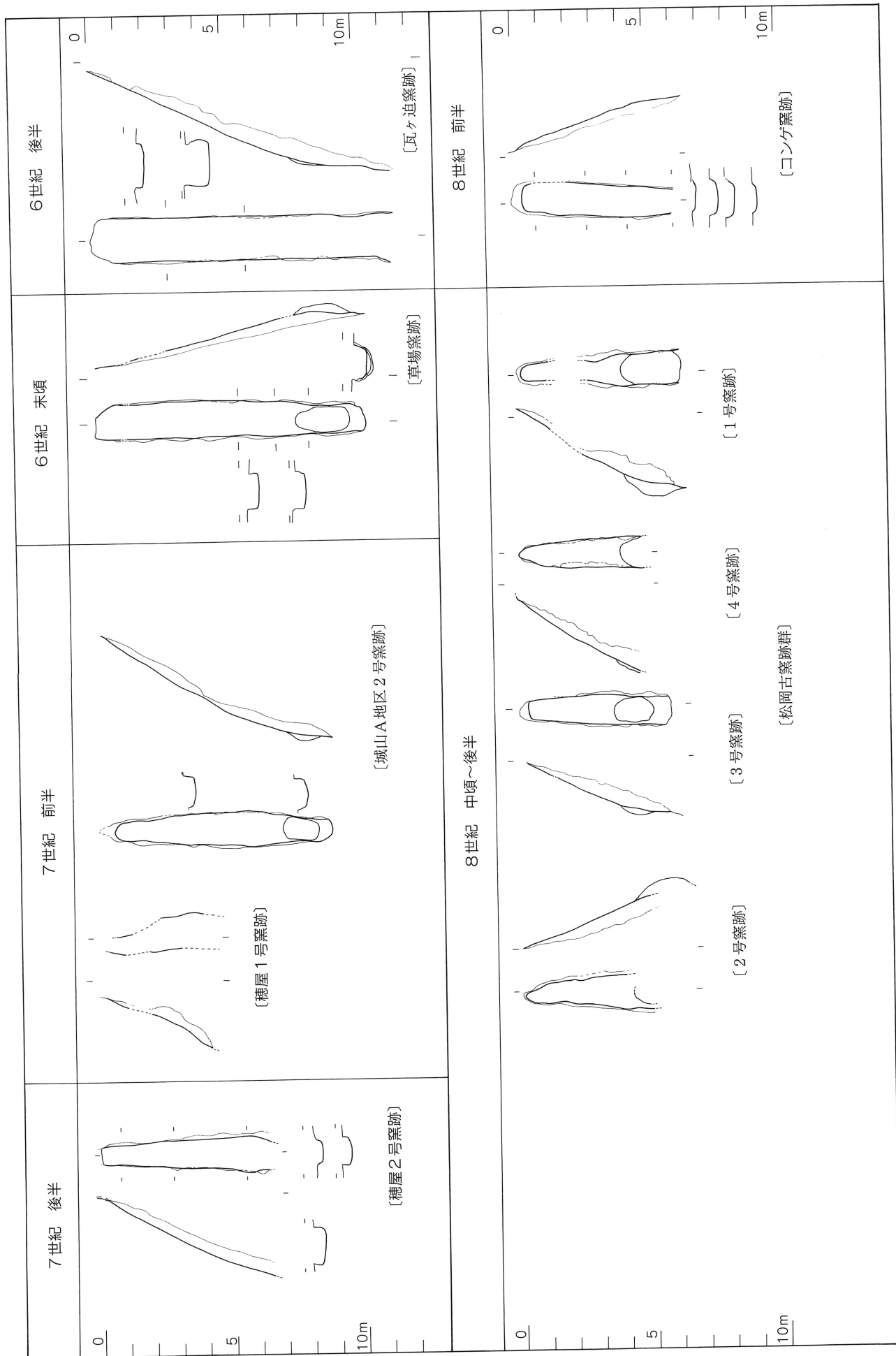
一方、松岡古窯跡群は8世紀後半代に形成されるが、2号窯及び3号窯跡から円面硯が出土しており、豊後国分寺や官衙などへの供給が開窯の起因と考えられる。

注1 小林昭彦「第3章 発掘調査の結果 1 桐ヶ迫遺跡の遺構と遺物」『一般国道宇佐道路 埋蔵文化財発掘調査報告書(2) 桐ヶ迫遺跡 峯添遺跡』大分県教育委員会1994年

2 『棒垣遺跡 ホヤ池窯跡』(1994年度中津地区遺跡群発掘調査報告VII)中津市文化財 調査報告第15集、1995年3月 中津市教育委員会

3 池邊千太郎「豊後須恵器窯跡について」『大分県地方史』第180号平成13年2月

4 宇佐市教育委員会の御教示



〔窯跡発掘図は以下の報告書から転載、一部改変〕
 ○瓦ヶ迫窯跡・草場窯跡：大分県教育委員会『一般国道中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書（4）』-伊藤田窯跡群-
 ○城山A地区2号窯跡：中津市教育委員会『伊藤田城山窯跡群』（中津市文化財調査報告第5集）1985年
 ○糖屋1・2号窯跡、コンガ窯跡：本報告書 ○松岡古窯跡群1～4窯跡：大分市教育委員会池邊千太郎氏から提供、御教示を得た。

第43図 県内の須恵器窯跡概略図（1/100）

第2節 出土須恵器の器種と時期

穂屋1号窯跡・2号窯跡、コング窯跡の3基から出土した須恵器の器種について説明を行う。なお、各器種の数量や比率は実測可能な個体から算出したものである。

杯 3種類ある。まず古墳時代以来の合子状の蓋杯である杯H、次に椀状の身をもつ杯G、高台をもつ杯Bである(注1)。杯G・Bの蓋はつまみをもち、内面に返りをもつ。内面の返りはコング窯跡では消失している。

穂屋1号窯跡では杯H・G・Bがみられる。杯Hは蓋の天井部と身の底部が回転ヘラ切り未調整を基本とし、若干のナデやヘラ調整がみられる程度となる。回転ヘラ削りはみられない。大きさは、蓋の口径が8.7cm～12cm、身の口径8.5cm～11cmと幅があるが、小型化は顕著である。杯Gは体部下半～底部が丸い形状である。蓋は擬宝珠状のつまみをもつが、その形態は一定せず7種類ほどみられる。杯Bは2点だけであるが、ひとつは杯Gに高台を付けた形態で、もう1点は体部下半に稜をもち全体にシャープ造りで金属器を思わせる。城山窯跡群B地区灰原から類品が出土している。杯全体に占める杯Gの比率は身が25% (32/128)、蓋は(44/122) 36%であり、身と蓋を合わせると30%となる。蓋は杯Bとのセット分が含まれ可能性や杯Hの身の蓋より実測点数が少ないなど考慮すべき点はあるが、杯Gの占める割合は高い。ほぼ同時期の城山B地区2号窯跡で抽出が可能な杯G・杯Hの身と比較すると窯内、灰原を合算した場合28% (17/61) である。城山窯跡群の場合は、灰原を1号窯跡と共有するため単純には比較できないが、生産傾向を反映していると考えられる。このよう同一窯跡群内で同時期の一様相を確認したものと見えよう。

穂屋2号窯跡では杯Hはまったくみられなくなる。杯G・杯Bが共存する。杯Bが窯内から3点出土しており、最終時の製品といえる。杯Gは穂屋1号窯跡と比較すると体部の湾曲は残るが、底部は平底化、器高に対する口径の比率は高く浅い形状となる。杯Bは高台はやや長く、ハ字状に開く。体部は体部中位から外へ屈曲する特徴がある。

コング窯跡では、杯蓋は内面の返りを消失し、その痕跡もまったくみられない。杯Bは矩形の短い高台をもつ。無高台の杯は平底をなし、体部の立上りは直線的で安定した形状を示す。

椀 穂屋1号窯跡の2点である。ともに立上りは内湾するタイプである。今回の調査では3基の窯を通じて出土例が少ない。

高杯 無蓋高杯がほとんどである。脚部には長脚と短脚がある。長脚は穂屋1号窯跡でみられ、ラップ状に開くタイプと筒部・脚裾部の別が明瞭なタイプの2種類ある。ともに脚部の透しは確認されていない。短脚高杯は杯部や脚端部の形状に若干の類型がみられるが、杯部と接合する基部から大きく開く特徴をもつ。穂屋2号窯跡の短脚高杯は基本的に1号窯跡と同様の形態であるが、脚部にやや高いタイプがある。

穂は穂屋2号窯跡の灰原範囲から出土した口頸部破片1点である。この窯の製品と断定はできない。

蓋 穂屋1号窯跡から短頸壺など壺類の蓋と思われるつまみをもたないタイプがみられる。また、杯G蓋の形態をもつが、314が口径22.6cm、316が18.8cmと大型例がある。セットとなる器種は鉢なども考えられるが不明瞭である。ただ、中津市内の諸田南遺跡SH1では口径20cm、器高7.5cmの蓋杯の身、至近地の犬丸川流域遺跡縫原地区SD2から口径16.9cm、器高6.7cmの蓋杯の身など6世紀後半の大型品が周辺の遺跡に確認されている(注2)。当該期の大型品は穂屋1号窯跡以外では確認されていないが、大型品生産の伝統を想起させる。

鉢 穂屋1号窯跡には小型品のものがある。体部は杯Gに近く、口縁部が外へ屈曲する。通有の鉢は体部が丸く開き気味に立ち上がるものである。2号窯跡例は口縁部がやや内湾するものと口縁部で外へ屈曲するものがあり、ともに体部下半を欠くため、底部の形態は不明である。

Ⅲ 穂屋2号窯跡の1点は体部が大きく開き下端が丸い。コング窯跡では大小あり、体部の立上りは直立気味、外に開くものなどがある。体部下端は丸いものもあるが、底部から明瞭な屈曲を示すものが多くなる。

平瓶 穂屋1号窯跡で多く出土した。口縁部が大きく開くもの、頸部からあまり開かず細いものがある。体部は丸い。穂屋2号窯跡ではほとんどみられない。

壺 長頸壺、広口の壺類が穂屋1・2号窯跡から出土している。また、1号窯跡の壺肩部4箇所に円形浮文を貼

付する例は、城山窯跡群B区灰原出土壺にもみられる。

甕 小形・中形・大形がある。小型は口径15cm、器高が30cmを超えない。穂屋1号窯跡では口縁部が短く屈曲する。中形は穂屋1・2号窯跡、コング窯跡でみられ、口頸部は短く、外反する。胴部は上半部が球体状に張る。口径40cm以上の大形は穂屋1号窯跡で出土した。口頸部は長く口縁端部が凸線が巡るものや肥厚する例がみられる。頸部外面には2～3区の文様帯が設けられ櫛描波状文が施される。

甗 穂屋1号窯跡に牛角状の把手と胴部下半が出土している。単孔式である。

硯 穂屋2号窯跡の窯内と灰原範囲から破片であるが、2点出土している。窯内の1点は圈脚硯の脚部でやや開く。硯面は失っている。灰原の1点は海の外堤～脚部の破片であるが、脚部の透しは不明である。

その他 小形の椀状をなし内外面に縦方向きの櫛描波状文を施している。底部に穿孔があり、伏せて焼台の機能をもつ、窯道具の一つと考えたい。

編年的位置付け

穂屋1号窯跡は杯H・杯Gが共存、杯Bが伴う。灰原出土がほとんどであるが、灰原が比較的短期間の操業を示し、間層がないことからほぼ同時期の一括資料と考えられる。

杯Hは身の口径が9cm前後と小型化が進み、立上りの退化が顕著な例がみられる。杯G(身)が杯全体の25%を占め、かなり高率といえる(注3)。杯身は杯Hの蓋を逆転したかのような形態は少なく、口縁部が直立気味に立ち上がる。底部は丸みをもつものが多い。杯蓋のつまみは乳頭状をなすものと扁平なものなどが存在する。このような状況は田辺編年TK217の中でも比較的新しい段階に位置付ける要素といえよう。中村編年Ⅲ-1段階。(7世紀前半・中頃)

穂屋2号窯跡は杯Hが消滅し、杯G・杯Bが共存する。杯蓋の返りは退化が進み短くなっているが、口縁部よりも下へ張り出すものがほとんどである。杯身は口径が広くなるとともに平底が明瞭となってくる。田辺編年TK46、Ⅲ-2段階。(7世紀後半代)

コング窯跡はつまみ付き蓋の内面の返りが消失する段階である。杯は、杯Bと無高台付杯で構成される。杯蓋は内面には返りの痕跡もなく、口縁端部を下方へ屈曲させる。田辺編年TK21、Ⅳ-1段階。(8世紀前半)

型式編年上、穂屋2号窯跡とコング窯跡の間には杯蓋において、内面の返りが最も退化するタイプ、あるいは痕跡を僅かに残すタイプで田辺編年TK48、Ⅲ-3段階に属する段階が考えられる。現在、窯資料は未発見である。

注1 杯H・G・Bの表記は西分類による。「七世紀の土器の時期区分と型式変化」(『土器様式の成立とその背景』西弘海、昭和61年)

2 浦井直幸「第3章調査の内容 第2節縫原地区の調査」(『犬丸川流域遺跡』中津市教育委員会 2008)また、中津市教委花崎徹氏・浦井直幸氏に御教示頂いた。

3 牛頸窯跡群では、7世紀初頭頃～前半(牛頸編年IVB期)に杯Gが普遍的に含まれるようになるが、杯Hに比べ比率が低く、1割以内と考えられている。舟山良一「V.出土遺物の検討 1. 須恵器の編年」『牛頸窯跡群-総括報告書I-』大野城市教育委員会 2008年

第3節 須恵器のヘラ記号

ヘラ記号をもつ須恵器は、ほとんどが穂屋1号窯跡に限定されるため、これを対象として説明する。なお、コング窯跡からは高台付杯の底部外面に「×」と蓋外面に「V」の2例だけあった。穂屋2号窯跡出土須恵器にヘラ記号は確認できなかった。

[穂屋1号窯跡出土須恵器のヘラ記号]

ヘラ記号をもつ器種は、杯、高杯、壺であるが、杯が最も多い。

杯は3種類あり、蓋杯(杯H)の蓋と身、杯(杯G)、高台付杯(杯B)、つまみ付きの蓋である(注1)。

ヘラ記号の記入率を実測可能な個体を母数とし、ヘラ記号を特定できた個体から算定すると、杯Hでは蓋が10%(8/78)、身は10%(10/95)、杯G身は13%(4/31)、つまみ付きで内面に返りのある蓋へのヘラ記号記入率は25%(11/44)となる。この種の蓋は杯G・Bとのセット関係は共通すると考えられるため一括して取り扱った。杯Bについては実測点数2点と少なく、そのうち1点の内面にヘラ記号がある。

ヘラ記号の種類

ヘラ記号は直線で構成されており、画数、筆致に基づき以下の12種類に分類できた。

I類：1本の線が刻まれるものである。緩い直線である。(82・131)

II類：2本の線で構成される。短くやや太い書体(148)、長めの平行線(203)、長めであるが、1本がやや斜行するもの(260)がある。

III類：3本の線で構成される。短くやや太い書体(129)、長めの平行線(87)、放射状のもの(86)がある。

IV類：「V」字形に表現される。2画で記されるもの(204)と、1線(196)で記されるものがある。

V類：「×」状に表現されるものである。書体が小型(83・84)、やや大型(125)の2種類ある。

VI類：IV類「×」とIV類「V」が併記されたものである(155)。

VII類：IV類「×」に1本を加えた3本で構成される。×と交点を共有するもの(128)、×にらせん状の1本が組み合うもの(205)がある。

VIII類：直線4本で構成される。1本に3本がほぼ直角に交差するもの(146・231)。

IX類：直線4本で構成される。平行する2本に×が組み合うもの(194)。

X類：直線5本で構成される。VIII類に1本加わるもの(88)

XI類：キ字状が2組が組み合うもの(233)。

XII類：Y字状が並列し短い直線が組み合うもの(245)

ヘラ記号の位置

ヘラ記号が記される位置は、①内面・外面、②部位の別がある。

①内外面の別は、ヘラ記号34点のうち、内面27点、外面7点である。内面の記入率が79%と圧倒的に高い。

②部位は、各器種ともに底部あるいは天井部の中心に記される例が多いが、84・146・148・231はやや周縁に記されている。

その他の器種では高杯をあげることができる。ヘラ記号記入例8点と杯の次に多く、II類・III類・V類・VII類・VIII類の5種類がある。この中でV類の282は特徴的であり、交差位置が端部に寄り、1本が屈曲して交差する。

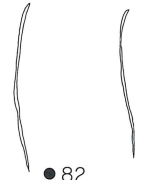



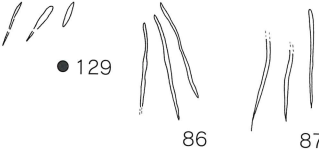


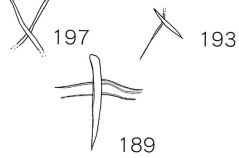

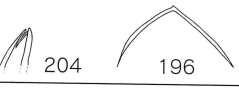











ヘラ記号の特徴

伊藤田窯跡群中でヘラ記号をもつ須恵器の出土状況を時期に沿ってみると、6世紀後半の瓦ヶ迫窯跡において、焼成部一括遺物から良好な検討資料を得た。窯内出土杯の62%(152/244)にヘラ記号をもち、内面への記入率75%、ヘラ記号の種類8種類を確認するなどの大きな成果があった(注1)。6世紀末頃では草場窯跡では窯内と灰原から151点蓋杯が出土しているが、杯のヘラ記号は灰原出土杯蓋2点だけであった(注1)。7世紀前半代では、今回調査を行った穂屋1号窯跡と同時期の城山窯跡群では、A地区1号土拵、B地区灰原、0地区などで僅かに確認される程度である(注2)。今回調査を実施した7世紀後半代の穂屋2号窯跡では確認されず、8世紀前半代・コング窯跡では杯Bと杯蓋の2点程度であった。現状では、伊藤田窯跡群西部地区となる穂屋1号窯跡より西側

では6世紀～8世紀中頃を通じ、ヘラ記号が希薄であり、以東の6世紀後半・瓦ヶ迫窯跡、7世紀前半・穂屋1号窯跡に偏在するヘラ記号の使用状況といえる。

注1 中津市教育委員会『伊藤田城山窯跡群』（中津市文化財調査報告第5集）1985年

2 大分県教育委員会『一般国道中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書（4）』—伊藤田窯跡群—1992年

器種 分類	蓋杯 (杯H)	杯 (杯G・杯B)	高杯
I類	 ●82 131		
II類	 148	 203 260 (杯B)	 ●306
III類	 ●129 86 87		 276 313
IV類	 84 83 145 103	 197 193 189	 266 261 282
V類		 204 196	
VI類	 ●155		
VII類	 128	 205	 269
VIII類	 146	 231	 296
IX類		 194	
X類	 88		
XI類		 233	 ●245

第44図 穂屋1号窯跡へら記号分類 (縮尺: 1/3)

※●は外面へら記号を示す

遺物觀察表

表7 コング窯跡遺物観察表(1)

コング窯跡

図版 番号	遺物 番号	器種	大きさ(cm)				形態・整形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	残存度	出土位置		備考
			口径	器高	底径 (脚部)	胴部 最大径				遺構 名等	層位	
第8図	1	杯蓋	13.7	2.5			底平なつまみ。内外面横ナデ。自然釉のため天井部調整不詳。	砂粒は少ない。黒色粒子含み、灰白から暗灰白色を呈し、焼成はやや不良。焼歪み。	口縁部一部欠損	窯内		
第8図	2	杯蓋	14.4	3.2			擬宝珠状のつまみ。つまみ周辺横ナデ。内外面横ナデ。天井部回転ヘラ削り。	砂粒は少ない。精緻。黒色粒子を少し含み、灰色、暗灰色を呈し、焼成は良好。	口縁部約1/3欠損	窯内		
第8図	3	杯蓋	14.3	3.3			低平なつまみ。つまみ周辺ナデ。内外面横ナデ。天井部回転ヘラ削り。	砂粒は少ない。茶灰黄色を呈し、焼成はやや良好。	口縁部1/4欠損	窯内、 焚口一括		
第8図	4	杯蓋	(14.6)	(2.6)			低平なつまみ。つまみ周辺ナデ。内外面横ナデ。天井部回転ヘラ削り。	砂粒は少ない。白色粒子含み、淡灰黄色を呈し、焼成は不良。焼歪み。	完形	窯内		
第8図	5	杯蓋	15.0	2.0			擬宝珠状のつまみ。つまみ周辺横ナデ。内外面横ナデ。天井部回転ヘラ削り。	砂粒は少ない。精緻。角閃石少し含み、灰色を呈し、焼成は良好。	口縁部約1/2欠損	窯内、 焚口		
第8図	6	杯蓋	15.4	2.7			擬宝珠状のつまみ。つまみ周辺横ナデ。内外面横ナデ。天井部回転ヘラ削り。	砂粒は少なく、精緻。黒色粒子、白色粒子を少し含み、灰色、灰白色を呈し、焼成は不良。焼歪み。	つまみ～天井部約2/3残存、 口縁部一部残存	窯内		
第8図	7	杯蓋	15.7	2.8			擬宝珠状のつまみ。つまみ周辺横ナデ。内外面横ナデ。天井部回転ヘラ削り。	砂粒は少なく、精緻。黒色粒子、白色粒子を含み、灰色を呈し、焼成は良好。焼歪み。	口縁部約1/4欠損	窯内、 一括		
第8図	8	杯蓋	15.8	2.5			擬宝珠状のつまみ。つまみ周辺横ナデ。内外面横ナデ。天井部回転ヘラ削り。	砂粒は少ない。黒色粒子を少し含み、灰色、灰白色、暗灰色を呈し、焼成は良好。焼歪み。	口縁部一部欠損	窯内 一括		
第8図	9	杯蓋	18.4	3.2			低平なつまみ。つまみ周辺ナデ。内外面横ナデ。天井部回転ヘラ削り。	砂粒は少ない。白色粒子、黒色粒子含み、(外)淡灰白色(内)暗灰色を呈し、焼成はやや不良。焼歪み。	つまみ部～ 口縁まで1/2 残存	窯内、 灰原		
第8図	10	杯蓋	18.2	3.7			低平なつまみ。つまみ周辺ナデ。内外面横ナデ。天井部回転ヘラ削り。	砂粒は少ない。白色粒子含み、淡灰黄色を呈し、焼成は不良。焼歪み。	つまみ～天井部・ 口縁部 1/2残存	窯内		
第8図	11	杯蓋	(18.7)	(3.3)			擬宝珠状のつまみ。内外面横ナデ。天井部回転ヘラ削り。	砂粒は少ない。角閃石、黒色粒子を少し含み、灰色、灰白色を呈し、焼成は不良。焼歪み。	口縁部～ つまみ約1/4 残存	窯内		
第8図	12	杯蓋					低平なつまみ。つまみ周辺ナデ。内外面横ナデ。天井部回転ヘラ削り。	砂粒は少ない。角閃石を含み、灰黄色を呈し、焼成は不良。	つまみ部～ 天井部までの 破片	灰原		
第8図	13	杯蓋	15.4	2.7			ロクロ。(外)回転ヘラケズリ(内・外)回転ヨコナデ(内)回転ナデ。	角閃石・白色粒子を含み、暗灰色を呈し、焼成は良好。	1/2残存	窯内 7.8 区		反転復元
第8図	14	杯蓋	18.3	3.4			乳頭状のつまみ。つまみ周辺ナデ。内外面横ナデ。天井部回転ヘラ削り。	砂粒は少ない。白色粒子含み、淡灰黄色を呈し、焼成は不良。焼歪み。	口縁部1/2残存	窯内		
第8図	15	杯蓋	18.2				乳頭状のつまみ。つまみ周辺ナデ。内外面横ナデ。天井部回転ヘラ削り。	砂粒は少ない。雲母・黒色粒含み、淡灰黄色を呈し、焼成は不良。焼歪み。	完形	窯内		
第8図	16	杯蓋	(14.5)				つまみ欠失。内外面横ナデ。天井部回転ヘラ削り。	砂粒は少ない。黒色粒子、白色粒子を少し含み、灰色、暗灰色を呈し、焼成は良好。	口縁部～天井部約1/2残存	窯内		
第8図	17	杯蓋	15.1				つまみ欠失。内外面横ナデ。天井部回転ヘラ削り。	砂粒は少ない。精緻。黒色粒子を少し含み、灰色、黒色を呈し、焼成は良好。	口縁部ほぼ 完形、天井部 一部欠損	窯内、 焚口一括		
第8図	18	杯蓋	15.8				つまみ欠失。内外面横ナデ。天井部回転ヘラ削り。	角閃石を含み、淡灰褐色、灰褐色を呈し、焼成は不良。	1/3残存	窯内		
第8図	19	杯蓋	(15.9)				内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒は少ない。精緻。黒色粒子、白色粒子を少し含み、灰色を呈し、焼成は良好。	口縁部約1/6 残存	窯内		
第8図	20	杯蓋	(14.8)				内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒は少ない。白色粒子、黒色粒子を含み、淡灰黄色を呈し、焼成はやや良。		窯内、 焚口		
第8図	21	杯身	12.1	3.6	8.4		内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	精緻。淡灰褐色を呈し、焼成は不良。	ほぼ完形	窯内		
第8図	22	杯身	12.2	3.5	(9.6)		内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	白色粒子をわずかに含み、灰褐色、黒色、暗灰色を呈し、焼成はやや不良。	1/4残存	窯内		

表8 コング窯跡遺物観察表(2)

図版番号	遺物番号	器種	大きさ(cm)				形態・整形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	残存度	出土位置		備考
			口径	器高	底径(脚部)	胴部最大径				遺構名等	層位	
第8図	23	杯身	12.5	4.4	9.2		内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒は少ない。黒色粒子含む。色調は淡灰白色、焼成は不良。焼歪み。	口縁部1/2残存	窯内		
第8図	24	杯身	12.6	4.2	8.2		つまみ欠失。内外面横ナデ。天井部回転ヘラ削り。	砂粒は少ない。角閃石をわずかに含み、淡黄褐色、黒色を呈し、焼成は不良。	口縁部約1/4残存、底部ほぼ完形	窯内		
第8図	25	杯身	12.6	3.7	(8.0)		内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	黒色粒子を含み、明淡褐色を呈し、焼成は不良。	1/2残存	窯内		
第8図	26	杯身	12.6	4.3	7.8		内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒は少ない。精緻。黒色粒子、白色粒子を少し含み、灰色を呈し、焼成は良好。	口縁部～胴部約1/4残存、底部約3/4残存	窯内、7区		
第8図	27	杯身	12.6	3.5	(9.1)		内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。	精緻。白色粒子を含み、暗青灰色を呈し、焼成は不良。	4/5残存	窯内		
第8図	28	杯身	12.7	4.0	8.6		ロクロ。(外)回転ヘラケズリ (内・外)回転ヨコナデ (内)回転ナデ	雲母・白色粒子を含み、淡黄灰色を呈し、焼成は不良。	口縁部～胴部2/3残存	窯内	3層	反転復元
第8図	29	杯身	12.9	3.5	(9.0)		内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒は少ない。黒色粒子を少し含み、灰白色、淡黄褐色を呈し、焼成は不良。	口縁部約1/4残存、底部約1/2残存	窯内		
第9図	30	杯身	12.6	3.8	9.1		内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	白色粒子を含み、灰色、黒灰色を呈し、焼成は良好。自然釉。	1/3残存	窯内	3層	
第9図	31	杯身	13.0	3.7	9.2		内外面横ナデ。底部回転ヘラ削り。	白色粒を含み、暗灰色を呈し、焼成は不良。	口縁部～胴部1/8残存	窯内		反転復元
第9図	32	杯身	13.0	4.1	(7.4)		内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	精緻。灰色粒子を含み、淡黄褐色を呈し、焼成は不良。	1/4残存	窯内		
第9図	33	杯身	(13.1)	3.9	(9.0)		内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒は少ない。角閃石をわずかに含み、淡黄褐色、黒色を呈し、焼成は不良。	口縁部約1/6残存、底部約1/2残存	窯内		
第9図	34	杯身	13.4	4.5	(8.4)		内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	雲母をわずかに含み、淡褐色、灰褐色を呈し、焼成は不良。	1/2残存	窯内		
第9図	35	杯身	12.7	(4.2)	(9.5)		内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒は少ない。精緻。黒色粒子を少し含み、灰色を呈し、焼成は良好。焼歪み。	口縁部～胴部約1/4残存、底部一部欠損	窯内		
第9図	36	杯身	13.6	4.6	10		内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒は少ない。黒色粒子含む、淡灰黄色を呈し、焼成は不良。	口縁部1/2残存	窯内		
第9図	37	杯身	13.8	3.8	10.2		内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒は少ない。白色粒子、黒色粒子含む、淡灰白色を呈し、焼成は不良。焼歪み。	口縁部1/7残存	窯内		
第9図	38	杯身	13.8	4.0~4.5	10.4		内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	雲母・白色粒子を含み、灰色・黒色・灰黄色を呈し、焼成は不良。被熱による底部のヒビ割れ。	完形	窯内		底径はヒビ割れにより0.4mm大きくなっている。
第9図	39	杯身	14.0	4.6	(9.3)		内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	白色粒子を含み、淡灰褐色、黒灰色、暗青灰色を呈し、焼成は良好。	1/2残存	窯内、主軸ベルト		
第9図	40	杯身	14.2	3.9	10.0		内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	精緻。黒色粒子を含み、淡褐色を呈し、焼成は不良。	1/2残存	窯内		
第9図	41	杯身	14.1	3.5	(10.0)		内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒は少ない。黒色粒子を少し含み、精緻。灰色、暗灰色、黒色を呈し、焼成は良好。	口縁部～胴部約1/2残存、底部約3/4残存	窯内、灰原		
第9図	42	杯身	14.0	4.1	(8.9)		内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒は少ない。黒色粒子、白色粒子をわずかに含む精緻。灰色を呈し、焼成は良好。焼歪み。	口縁部～胴部約1/2残存、底部ほぼ完形	窯内		
第9図	43	杯身	14.5	4.4			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒は少ない。淡青灰色を呈し、焼成はやや良好。	口縁部1/4残存	窯内		
第9図	44	杯身	16.6	4.9	12.2		内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒は少ない。白色粒子含む、淡灰黄色を呈し、焼成はやや不良。焼歪み。	口縁部3/4残存	窯内		

表9 コング窯跡遺物観察表(3)

図版 番号	遺物 番号	器種	大きさ(cm)				形態・整形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	残存度	出土位置		備考
			口径	器高	底径 (脚部)	胴部 最大径				遺構 名等	層位	
第9図	45	杯身	18.7				内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒は少ない。白色粒子を含み、淡茶灰黄色を呈し、焼成は不良。焼歪み。	口縁部から杯部まで1/4残存	窯内		
第9図	46	杯身	(13.0)	(3.2)	(9.6)		内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒は少ない。暗灰色を呈し、焼成は良好。焼歪み。		窯内		
第9図	47	杯身	14.4	3.4	(11.1)		内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒は少ない。白色粒子を含み、灰褐色を呈し、焼成はやや良好。	口縁部1/4残存	窯内、 灰原		
第9図	48	杯身		(3.1)			内外面横ナデ。	砂粒は少ない。暗灰色～灰白色を呈し、焼成はやや良好。	口縁部1/8残存	窯内		
第9図	49	高台付杯身	12.2	4.4	8.8		内外面横ナデ。底部回転ヘラ削り。	砂粒は少ない。精緻。黒色粒子、白色粒子を少し含み、灰色を呈し、焼成は良好。焼歪み。	口縁部～底部まで1/2残存 胴部一部欠損	窯内		
第9図	50	高台付杯身	12.5	4.0	8.6		内外面横ナデ。	砂粒は少ない。白色粒子を含み、青灰色を呈し、焼成はやや良好。焼歪み。	口縁部～底部ほぼ1/2残存	窯内、 4区		
第9図	51	高台付杯身	13.2				高台剥落。内外面横ナデ。	角閃石・白色粒子を含み、暗灰色を呈し、焼成は良好。	1/4残存	窯内、 灰原		
第9図	52	高台付杯身	13.4	(4.0)	8.3		内外面横ナデ。底部回転ヘラ削り。	雲母・白色粒子を含み、明淡褐色を呈し、焼成は不良。	1/2残存	窯内		
第9図	53	高台付杯身	13.3	4.4	8.7		内外面横ナデ。底部回転ヘラ削り。	砂粒は少ない。精緻。黒色粒子、白色粒子を少し含み、灰白色を呈し、焼成は不良。	口縁部～胴部約1/3残存、 底部約2/3残存	窯内		
第9図	54	高台付杯身	13.6	4.6	8.5		内外面横ナデ。底部回転ヘラ削り。	砂粒は少ない。白色粒子を含み、黄灰褐色を呈し、焼成はやや不良。焼歪み。	完形	窯内		
第9図	55	高台付杯身	12.8	3.9	8.1		内外面横ナデ。底部回転ヘラ削り。	砂粒は少ない。白色粒子を含み、灰黄褐色を呈し、焼成はやや不良。焼歪み。	口縁部3/4残存	窯内		高台に焼成前切込み
第9図	56	高台付杯身	(12.2)	3.9	(9.0)		内外面横ナデ。	角閃石、灰色粒子を含み、灰黄色を呈し、焼成は不良。	1/5残存	窯内		
第9図	57	高台付杯身	15.8	6.2	9.1		内外面横ナデ。底部回転ヘラ削り。	角閃石・白色粒子を含み、暗灰色を呈し、焼成は良好。焼歪み。	1/2残存	窯内		
第9図	58	皿	12.4	1.8	(9.6)		小型。内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後中心部周辺を回転ヘラ削りで調整。	雲母・白色粒を含み、灰色・黒色、暗灰色・暗黄灰色を呈し、焼成は不良。焼歪み。	口縁部1/6～ 底部1/2残存	窯内		
第9図	59	皿	12.5	1.5	(10.0)		小型。内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	精緻、雲母を含み、淡褐色を呈し、焼成は不良。	口縁部1/3、 底部4/5残存	窯内		
第9図	60	皿	13.7	1.5	(11.6)		小型。内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	角閃石を多く含み、淡黄褐色、黒色を呈し、焼成は不良。内面にスス、外面の一部にスス付着。	1/3残存	窯内		
第9図	61	皿	14.6	1.6	10.6		小型。内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後ヘラ削りで調整。	精緻。角閃石・雲母を含み、淡灰褐色を呈し、焼成は不良。	1/2残存	窯内		
第10図	62	皿	16.7	2.7	(14.0)		内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	雲母・黒色粒を含み、明淡褐色を呈し、焼成は不良。	口縁部1/8 残存、底部 完存	窯内		
第10図	63	皿	16.2	3.1	(10.3)		内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒は少ない。角閃石を含み、淡黄灰白色を呈し、焼成は不良。	口縁部～底部まで1/4残存	窯内		
第10図	64	皿	16.8	3.4			小型。内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後ヘラ調整。	精緻。雲母・黒色粒子を含み、淡灰褐色を呈し、焼成は不良。	1/2残存	窯内		
第10図	65	皿	17.3	1.6			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒は少ない。黒色粒子を少し含み、灰白色を呈し、焼成は不良。	口縁部～底部まで約1/2残存	窯内		
第10図	66	皿	18.6	2.2	(17.3)		内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒は少ない。角閃石わずかに含み、灰白色、淡黄褐色を呈し、焼成は不良。	口縁部～胴部約1/4残存、 底部約3/4残存	窯内、 焚口一括		

表10 コンゲ窯跡遺物観察表(4)

図版 番号	遺物 番号	器種	大きさ(cm)				形態・整形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	残存度	出土位置		備考
			口径	器高	底径 (脚部)	胴部 最大径				遺構 名等	層位	
第10図	67	皿	18.1	3.1			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	精緻。角閃石・黒色粒子を含み、淡灰褐色を呈し、焼成は不良。	ほぼ完形	窯内	3層	
第10図	68	皿	18.7	2.1	(16.3)		内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	精緻。黒色粒子を含み、淡灰褐色を呈し、焼成は不良。	口縁部1/4残存	窯内、 灰原	2層	
第10図	69	皿	19.2	1.9	(16.0)		内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	精緻。黒色粒子を含み、淡灰褐色を呈し、焼成は不良。	口縁部約1/3 残存、底部 4/5残存	窯内		
第10図	70	皿	19.3	1.9	(17.2)		内外面横ナデ。	砂粒は少ない。黒色粒子を含み、淡黄灰色。	口縁部1/4残存	窯内		
第10図	71	皿	18.8	2.5	(17.4)		内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	精緻。銀雲母、灰・黒色粒子を含み、淡黄褐色、暗褐色を呈し、焼成は不良。外底部一部スス付着。	口縁部1/3残存	窯内		
第10図	72	皿	19.1	2.2	17.0		内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	精緻。黒色粒子を含み、淡灰褐色を呈し、焼成は不良。	4/5残存	窯内		
第10図	73	皿	19.2	2.7			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒は少ない。黒色粒子、白色粒子を少し含み、灰白色を呈し、焼成は良好。	口縁部約1/4 欠損、天井部 一部欠損	窯内		
第10図	74	皿	19.4	2.5			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	精緻。角閃石・雲母を含み、淡黄灰褐色、暗灰褐色、黒灰色を呈し、焼成は不良。底部に濃いスス付着、二次被熱。	口縁部1/5、 底部2/3残存	窯内、 灰原		
第10図	75	皿	20.0	2.6			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り、周縁部回転ヘラ削りで調整。	精緻。雲母・黒色粒子を含み、淡灰褐色を呈し、焼成は不良。	4/5残存	窯内		
第10図	76	皿	19.7	2.0	17.3		内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	精緻。角閃石・雲母をわずかに含み、灰褐色、淡灰褐色を呈し、焼成は不良。	口縁部1/4 残存、底部 1/1残存	窯内		
第10図	77	皿	20.9	(2.5)	(18.0)		内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り、周縁部ヘラ調整。	角閃石・雲母を含み、淡灰褐色、灰褐色を呈し、焼成は不良。	4/5残存	窯内		
第10図	78	甕	(20.8)				口頸部内外面横ナデ。胴部外面平行叩き。内面同心円当具痕。	砂粒は少ない。灰黄色を呈し、焼成は良好。焼歪み。	口縁部～肩部 にかけ残存	窯内		
第10図	79	杯蓋					つまみ周辺ナデ。	砂粒は少ない。白色粒子、黒色粒子を少量含み、灰～淡灰黄色を呈し、焼成はやや良。		灰原	3層	
第10図	80	杯蓋					つまみ周辺ナデ。内外面横ナデ。天井部回転ヘラ削り。	砂粒は少ない。黒色粒子を少量含み、淡灰黄色、灰色を呈し、焼成はやや良。		灰原	3層	
第10図	81	杯蓋					低平なつまみ。つまみ周辺ナデ。天井部回転ヘラ削り。	精緻。暗青灰色を呈し、焼成は良好。	天井部片 (つまみのみ 完形)	灰原	2層、 3層	
第10図	82	杯	13.6	3.7	9.0		内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。	砂粒は少ない。白色粒子、黒色粒子を少量含み、灰色を呈し、焼成はやや良。		窯内、 灰原	3層	
第10図	83	杯身	14.3	3.9	(11.0)		内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	精緻。淡灰褐色、淡褐色を呈し、焼成は不良。	2/5残存	窯内		
第10図	84	杯	14.0	3.8	9.4		内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒は少ない。白色粒子、黒色粒子を少し含み、灰色を呈し、焼成はやや良。		灰原	3層	

表11 穂屋1号窯跡遺物観察表(1)

穂屋1号窯跡

※表中の「蓋杯」は西分類(p69注1)の杯Hを示す。

図版 番号	遺物 番号	器種	大きさ(cm)				形態・整形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	ヘラ 記号	残存度	出土位置 遺構名等	備考
			口径	器高	底径 (脚部)	胴部 最大径						
第15図	1	蓋杯身	10.4	3.4			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	角閃石・長石を多量を含み、灰白色を呈し、焼成は不良。		完形	灰原C-5	
第15図	2	高杯	(10.0)				高杯杯部。内外面横ナデ。	砂粒少量。黒色破裂痕を少量含み、灰白色を呈し、焼成は不良。		口縁部1/8残存	窯内	
第15図	3	高杯					内外面横ナデ。	砂粒少量。黒色破裂痕を少量含み、灰色を呈し、焼成は良好。		杯底部一部欠損、脚部上部1/3残存	窯内	
第15図	4	高杯				9.6	内面横ナデ。外面自然釉のため調整不詳。	砂粒少量。黒色破裂痕・白色細砂を少量含み、灰色(外面は黒色)を呈し、焼成は良好。		脚部1/2残存	窯内	外面に自然釉付着
第15図	5	高杯				9.0	外面自然釉のため調整不詳。内面横ナデ。	砂粒少量。黒色破裂痕・白色細砂を少量含み、外面は黒色、内面は灰色を呈し、焼成は良好。		脚部～脚端部1/2残存	窯内	外面に自然釉付着
第15図	6	壺	6.9			(13.8)	壺脚部。内外面横ナデ。	砂粒少量。黒色破裂痕を少量含み、灰色を呈し、焼成は良好。		脚部1/8残存	窯内	
第15図	7	平瓶	(7.8)				内外面横ナデ。	砂粒少量。黒色破裂痕・白色細砂を少量含み、灰色を呈し、焼成は良好。		口縁部1/3残存	窯内	
第15図	8	平瓶					内外面横ナデ。	砂粒少量。黒色破裂痕・白色細砂を少量含み、灰色を呈し、焼成は良好。		口縁部1/4残存、口縁端部一部残存	窯内	
第15図	9	不明					内外面横ナデ。	砂粒少量。黒色破裂痕を少量含み、灰色を呈し、黒色の自然釉が付着。焼成は良好。			窯内	外面に自然釉付着
第15図	10	壺類					内外面横ナデ。	砂粒少量。黒色破裂痕・白色細砂を少量含み、灰色を呈し、焼成は良好。		口縁部破片	窯内	
第15図	11	壺	8.8			(17.3)	外面横ナデ、下部回転ヘラ削り。内面横ナデ、指頭痕。	砂粒多量。角閃石・長石・白色粒子を含み、灰色～灰褐色を呈し、焼成は不良。		1/2残存	窯内	
第15図	12	蓋杯身	10.4	3.5			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り未調整。	砂粒少量。灰色を呈し、焼成は堅緻。		3/4残存	灰原D-10	
第15図	13	蓋杯蓋	(10.6)	3.3			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後、ヘラ調整。	砂粒少量。白色粒子・黒色粒子微細～1mm少量を含み、灰色を呈し、焼成は堅緻。		口縁部1/4残存	灰原E-10	
第15図	14	蓋杯蓋	11.7				内外面横ナデ。天井部回転ヘラ切り。	白色砂粒微量、黒色破裂痕を含み、灰色を呈し、焼成は良好。		1/4残存	灰原D-10	
第15図	15	蓋杯蓋	(10.9)	3.9			内外面横ナデ。天井部回転ヘラ切り。	角閃石を多量、白色粒子を少量含み、灰黄色を呈し、焼成は不良。		1/3残存	灰原B・C-5	
第15図	16	蓋杯蓋	11.0	3.6			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。	砂粒少量。白色粒子・黒色粒子を少量含み、灰白色～暗灰色を呈し、焼成は堅緻。		1/3残存	灰原E-9	外面に自然釉付着
第15図	17	蓋杯蓋	11.1	3.4			内外面横ナデ。天井部自然釉のため、調整不詳。	砂粒少量。黒色破裂痕を含み、暗灰色を呈し、焼成は良好。		4/5残存	灰原E-9・10、F-10	外面に自然釉付着
第15図	18	蓋杯蓋	11.2	3.3			内外面横ナデ。天井部回転ヘラ切り。	砂粒少量。暗灰色を呈し、焼成は良好。		完形	灰原B-4	
第15図	19	蓋杯蓋	11.2	3.2			内外面横ナデ。天井部回転ヘラ切り。	黒色破裂痕を含み、灰色を呈し、焼成は良好。		2/3残存	灰原C・D-6	外面に自然釉付着
第15図	20	蓋杯蓋	11.0	3.6			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒少量。黒色破裂痕・白色細砂を少量含み、灰色を呈し、焼成は良好。		天井部一部欠損、口縁部1/3残存	窯内	
第15図	21	蓋杯蓋	(10.8)	3.5			内外面横ナデ。天井部回転ヘラ切り。	砂粒少量。白色粒子含み、灰白色を呈し、焼成はやや良。		口縁部～天井部3/4残存	灰原D-10、E-9	
第15図	22	蓋杯蓋	10.8	3.2			内外面横ナデ。天井部自然釉のため、調整不詳。	砂粒少量。白色細砂・黒色破裂痕を少量含み、灰色を呈し、焼成は良好。		1/5残存	灰原D-7	

表12 穂屋1号窯跡遺物観察表(2)

※表中の「蓋杯」は西分類(p.69注1)の杯Hを示す。

図版 番号	遺物 番号	器種	大きさ(cm)				形態・整形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	へら 記号	残存度	出土位置 遺構名等	備 考
			口径	器高	底径 (脚部)	胴部 最大径						
第15図	23	蓋杯蓋	11.4	3.4			内外面横ナデ。天井部回転 へら切り未調整。	砂粒少量。淡灰色を呈し、焼成 は不良。		1/4残存	灰原E-11	
第15図	24	蓋杯蓋		3.3			内外面横ナデ。天井部回転 へら切り。	白色粒子を含み、灰色を呈し、 焼成は良好。		1/2残存	灰原D-11、 E-9	
第15図	25	蓋杯蓋	11.6	3.6			内外面横ナデ。天井部回転 へら切り。	砂粒少量。黒色破裂痕を含み、 青灰色を呈し、焼成は良好。		1/2残存	灰原D-10	
第15図	26	蓋杯蓋	11.7	4.1			内外面横ナデ。天井部回転 へら切り。	砂粒少量。灰黄白色を呈し、焼 成は不良。		3/4残存	灰原D-10	
第15図	27	蓋杯蓋	12.0	3.4			内外面横ナデ。底部回転へ ら切り後、へら調整。	砂粒少量。白色粒子・黒色粒子 を少量含み、灰色を呈し、焼成 は堅緻。		1/2残存	灰原E-8	
第15図	28	蓋杯蓋	11.8	3.5			口縁部で外反。内外面横ナ デ。底部回転へら切り。	砂粒少量。灰白色を呈し、焼成 は堅緻。		3/4残存	灰原C-6	
第15図	29	蓋杯蓋	11.8				内外面横ナデ。底部回転へ ら切り後ナデ。	白色粒子を少量含み、灰色を呈 し、焼成は良好。		1/4残存	灰原D-7	
第15図	30	蓋杯蓋	11.8	3.0			内外面横ナデ。天井部回転 へら切り。	砂粒少量。角閃石・長石を少量 含み、灰褐色を呈し、焼成は 不良。		1/4残存	灰原E-5・6	
第15図	31	蓋杯身	10.4	3.3			内外面横ナデ。底部回転へ ら切り後ナデ。	白色粒子を少量含み、暗灰色を 呈し、焼成は良好。		1/4残存	灰原E-7	
第15図	32	蓋杯蓋	10.6	3.1			内外面横ナデ。天井部回転 へら切り後ナデ。	砂粒少量。白色粒子・黒色粒子 を含み、灰褐色を呈し、焼成は 不良。焼歪みあり。			灰原D-11	
第15図	33	蓋杯蓋	11.3	3.5			内外面横ナデ。底部回転へ ら切り。	砂粒少量。白色粒子・黒色粒子 を少量含み、灰色を呈し、焼成 は堅緻。		口縁部3/4残存	灰原E-9・10	
第15図	34	蓋杯蓋	11.1	3.1			内外面横ナデ。天井部回転 へら切り。	砂粒少量。白色粒子含み、青灰 色を呈し、焼成は良好。			灰原E-6	
第15図	35	蓋杯蓋	10.9	3.6			内外面横ナデ。天井部回転 へら切り。	砂粒少量。黒色破裂痕・白色細 砂を少量含み、灰色を呈し、焼 成は良好。	天井部～口縁 部1/2残存		灰原B-4、 E-10、G-8	
第16図	36	蓋杯蓋(1.2)	3.1				内外面横ナデ。天井部回転 へら切り。	白色粒子を含み、暗青灰色を呈 し、焼成は良好。		1/3残存	灰原E-11	
第16図	37	蓋杯蓋	11.9	3.3			内外面横ナデ。天井部回転 へら切り。	砂粒少量。角閃石を極少量、白 色粒子を微量含み、灰色を呈し、 焼成は良好。		1/4残存	灰原C-6	
第16図	38	蓋杯蓋	11.6				内外面横ナデ。底部回転へ ら切り後、へら調整。	砂粒少量。白色粒子・黒色粒子 を少量含み、灰黄色を呈し、焼 成はやや不良。		口縁部1/6残存	灰原E-9	
第16図	39	蓋杯蓋	12.3	3.5			内外面横ナデ。	砂粒微量。灰色を呈し、焼成は 良好。		1/3残存	灰原D-10	
第16図	40	蓋杯蓋	13.1	4.0			内外面横ナデ。天井部回転 へら切り	精緻。灰褐色を呈し、焼成は やや良好。		3/4残存	灰原C-4・6	
第16図	41	蓋杯蓋	11.1	3.3			内外面横ナデ。底部回転へ ら切り後、ナデ。	砂粒少量。白色粒子・黒色粒子 を少量含み、灰色を呈し、焼成 は堅緻。		口縁部1/4残存	灰原E-9	
第16図	42	蓋杯蓋	10.9				内外面横ナデ。	砂粒少量。白色粒子・黒色粒子 を少量含み、灰色を呈し、焼成 はやや不良。		口縁部1/6残存	灰原E-10	
第16図	43	杯身	(10.8)	(3.5)			内外面横ナデ。	砂粒少量。角閃石・長石を少量 含み、黄灰色を呈し、焼成は不 良。	口縁部～底部 1/5残存		灰原E-11	
第16図	44	蓋杯蓋	11.9	3.9			内外面横ナデ。天井部回転 へら切り。	黒色破裂痕を含み、灰色を呈し、 焼成は良好。		2/3残存	灰原D-8	外面に自 然釉付着

表13 穂屋1号窯跡遺物観察表(3)

※表中の「蓋杯」は西分類(p69注1)の杯Hを示す。

図版 番号	遺物 番号	器種	大きさ(cm)				形態・整形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	ヘラ 記号	残存度	出土位置 遺構名等	備考
			口径	器高	底径 (脚部)	胴部 最大径						
第16図	45	蓋杯蓋	(13.9)	(4.2)			内外面横ナデ。天井部回転ヘラ切り後ナデ。	角閃石・長石を極小、赤色粒を多量に含み、黄灰色を呈し、焼成は不良。		1/3残存	灰原E-5	
第16図	46	蓋杯蓋	11.4	4.3			内外面横ナデ。天井部回転ヘラ切り後ナデ。	精緻。長石を含み、灰褐色を呈し、焼成は良好。		2/3残存	灰原D-7・10、E-10	
第16図	47	蓋杯蓋	(9.8)	(3.1)			内面横ナデ。天井部回転ヘラ切り後ナデ。	白色砂粒を若干含み、明青灰色を呈し、焼成は良好。			灰原D-7	
第16図	48	蓋杯蓋	10.9	3.0			内面横ナデ。天井部回転ヘラ切り。	砂粒少量。黒色破裂痕、白色粒子を多量含み、灰色を呈し、焼成は良好。		3/4残存	灰原B-5	
第16図	49	蓋杯蓋	10.8	3.5			内面横ナデ。天井部回転ヘラ切り後ナデ。	砂粒微量。暗灰色を呈し、焼成は良好。		1/3残存	灰原E-10	
第16図	50	蓋杯蓋	10.8	3.6			内面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒微量。暗灰色を呈し、焼成は良好。		2/3残存	灰原B-4	
第16図	51	蓋杯蓋	11.2	4.1			内面横ナデ。天井部回転ヘラ切り。	砂粒少量。灰白色を呈し、焼成は不良。		完形	灰原D-6	
第16図	52	蓋杯蓋	11.0	3.4			内面横ナデ。天井部回転ヘラ切り。	白色砂粒を少量含み、暗灰色を呈し、焼成は良好。		1/2残存	灰原B-4	
第16図	53	蓋杯蓋	11.8	3.1			内面横ナデ。天井回転ヘラ切り。	砂粒微量。黒灰色を呈し、焼成は良好。		1/2残存	灰原B-4	外面に自然釉付着
第16図	54	蓋杯蓋	11.7				内外面横ナデ。	角閃石を多量、黒色粒子を若干含み、灰白色を呈し、焼成は不良。		口縁部～体部 1/4残存	灰原B-4	
第16図	55	蓋杯蓋	14.4	4.2			内外面横ナデ。天井部回転ヘラ切り。	砂粒少量。青灰色を呈し、焼成はやや不良。		口縁部～底部 1/2残存	灰原E-9・10	
第16図	56	杯蓋	9.9	2.8			内外面横ナデ。天井部回転ヘラ切り。	白色粒子を含み、灰色を呈し、焼成は良好。		1/2残存	灰原D-11 No.11	
第16図	57	蓋杯蓋	10.5	3.3			内面横ナデ。自然釉のため、外面調整不詳。底部回転ヘラ切り。	砂粒少量。外面は淡灰色、内面は黒灰色を呈し、焼成は良好。二次焼成。		口縁部～天井部 3/4残存	灰原E-11	外面全体に自然釉付着
第16図	58	蓋杯蓋	10.2	4.0			小型。内外面横ナデ。天井部回転ヘラ切り後、ナデ。	角閃石・白色粒子・黒色粒子を少量含み、にぶい褐色を呈し、焼成は不良。		1/2残存	灰原D-5	
第16図	59	蓋杯蓋	10.5	4.0			内外面横ナデ。天井部回転ヘラ切り後ナデ。	白色細砂を若干含み、青灰色を呈し、焼成は良好。		3/4残存	灰原D-7	
第16図	60	蓋杯蓋	(10.0)	3.4			内外面横ナデ。天井部回転ヘラ切り。	砂粒少量。黒色破裂痕を含み、外面は灰白色、内面は黒灰色を呈し、焼成は良好。		底部完形	灰原E-9、G-9	
第16図	61	蓋杯蓋	(10.7)	3.6	6.4		内外面横ナデ。天井部回転ヘラ切り。	砂粒少量。黒色粒子を含み、灰色を呈し、焼成は良好。焼歪みあり。		口縁部～1/4 残存	灰原E-10	
第16図	62	蓋杯蓋	10.6	3.4			内外面横ナデ。天井部自然釉のため調整不詳。	砂粒少量。黒色破裂痕を少量含み、灰色を呈し、焼成は良好。		天井部1/2 残存、口縁部 1/4残存	窯内	外面に自然釉付着
第16図	63	蓋杯蓋	10.8	3.4			内面横ナデ。天井部回転ヘラ切り。	砂粒少量。暗灰色を呈し、焼成は良好。		2/3残存	灰原B-5	
第16図	64	蓋杯蓋	(11.0)				内外面横ナデ。天井部回転ヘラ切り後ナデ。	白色砂粒・石英を少量含み、白灰色を呈し、焼成は良好。		1/4残存	灰原D-10	
第16図	65	蓋杯蓋	11.1	4.0			内外面横ナデ。天井部回転ヘラ切り。	砂粒少量。角閃石・長石を少量含み、灰白色を呈し、焼成は不良。		口縁部1/3～ 底部残存	灰原D-6	
第16図	66	蓋杯蓋	11.4	3.5			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。	砂粒少量。角閃石・長石を少量含み、灰色を呈し、焼成は良好。		口縁部3/4～ 底部完形	灰原D-6	外面に自然釉付着

表14 穂屋1号窯跡遺物観察表(4)

※表中の「蓋杯」は西分類(p69注1)の杯Hを示す。

図版 番号	遺物 番号	器種	大きさ(cm)				形態・整形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	へら 記号	残存度	出土位置 遺構名等	備 考
			口径	器高	底径 (脚部)	胴部 最大径						
第16図	67	蓋杯蓋	11.3	4.0			内外面横ナデ。天井部回転 へら切り。			口縁部3/4残 存、底部完形	灰原D-6	
第16図	68	蓋杯蓋	11.9	3.6			内外面横ナデ。天井部回転 へら切り後ナデ。			口縁部～胴部 1/4残存、底 部1/3残存	灰原C-7、 D-10	
第16図	69	蓋杯蓋	(12.9)	(3.5)			内外面横ナデ。			1/6残存	灰原D-10	
第16図	70	蓋杯蓋	11.6	3.6			内外面横ナデ。天井部回転 へら切り。			1/3残存	灰原E-9	
第16図	71	蓋杯蓋	11.3	3.9			内外面横ナデ。底部回転 へら切り。			2/3残存	灰原E-9・11	
第17図	72	蓋杯蓋	9.9	2.8			内外面横ナデ。天井部回転 へら切り後ナデ。			1/2残存	灰原D・ E-10	
第17図	73	蓋杯蓋	10.7	3.4			内面横ナデ。天井部回転 へら切り後ナデ。			1/3残存	灰原E-6、 F-10	内面に自 然釉付着
第17図	74	杯蓋	11.8	3.6			内外面横ナデ。底部回転 へら切り。			1/4残存	灰原D-7、 D-7	
第17図	75	蓋杯蓋	11.6	3.3			内外面横ナデ。天井部回転 へら切り。			1/4残存	灰原E-7・9	外面に自 然釉付着
第17図	76	蓋杯蓋	12.2	3.0			内外面横ナデ。天井部回転 へら切り。			1/4残存	灰原E-5・6	
第17図	77	蓋杯蓋	(13.6)				内外面横ナデ。			1/6残存	灰原D-10	外面に自 然釉付着
第17図	78	蓋杯蓋	12.5	3.7			内外面横ナデ。自然釉のた め、天井部の切離し技法不 詳。			1/4残存	灰原E-5	外面に自 然釉付着
第17図	79	蓋杯蓋	(12.7)	(3.5)			内外面横ナデ。天井部回転 へら切り。				灰原E-6	外面に自 然釉付着
第17図	80	蓋杯蓋	12.2	3.8			内外面横ナデ。底部自然釉 のため調整不詳。			1/4残存	灰原D-10	外面に自 然釉付着
第17図	81	蓋杯蓋	11.1	3.7			内外面横ナデ。底部回転 へら切り。	外面 IV類	口縁部～底部 一部欠損		灰原E-11	
第17図	82	蓋杯蓋	11.8	3.9			内外面横ナデ。天井部回転 へら切り。	外面 I類	1/2残存		灰原D-9	外面に自 然釉付着
第17図	83	蓋杯蓋	11.5	3.5			内面横ナデ。天井部回転 へら切り。	内面 IV類	1/3残存		灰原B-4	
第17図	84	蓋杯蓋	11.0	2.8			内外面横ナデ。天井部回転 へら切り	内面 IV類	3/4片		灰原C-4	外面に部 分的に自 然釉付着
第17図	85	蓋杯蓋	11.2				内外面自然釉付着により調 整不明。	内面	1/3残存		灰原E-8	
第17図	86	蓋杯身	12.1	4.1			内外面横ナデ。天井部回転 へら切り後へらナデ。	内面 III類	口縁部1/3残 存、底部完形		灰原D-6・7	
第17図	87	蓋杯蓋	12.4	3.7+			内外面横ナデ。天井部回転 へら切り後ナデ。	内面 III類	口縁部1/3残 存、底部2/3 残存		灰原D-7・9、 G-9	
第17図	88	蓋杯蓋	12.6	3.5			内外面横ナデ。天井部多方 向のへら削り調整。	内面 X類	1/2残存		灰原C-10、 D-8	

表15 穂屋1号窯跡遺物観察表(5)

※表中の「蓋杯」は西分類(p69注1)の杯Hを示す。

図版 番号	遺物 番号	器種	大きさ(cm)				形態・整形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	ヘラ 記号	残存度	出土位置 遺構名等	備考
			口径	器高	底径 (脚部)	胴部 最大径						
第18図	89	蓋杯身	8.6	3.0			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒少量。暗灰色を呈し、焼成は堅緻。		4/5残存	灰原D-6	
第18図	90	蓋杯身	8.3	3.0			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒少量。灰白色を呈し、焼成はやや不良。		1/4残存	灰原E-9	
第18図	91	蓋杯身	(8.5)				内面横ナデ。	砂粒微量。黒灰色を呈し、焼成は良好。			灰原D-7 No.28	
第18図	92	蓋杯身	8.9	2.8			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒少量。長石を少量含み、オリブ灰色を呈し、焼成は堅緻。		1/4残存	灰原D-11 No.2	外面に自然釉付着
第18図	93	蓋杯身	9.4	2.1			小型。内面横ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。	砂粒少量。白色粒子を多量、黒色粒子を少量含み、灰色を呈し、焼成は堅緻。		1/2残存	灰原C-6	
第18図	94	蓋杯身	9.8	3.0			内外面横ナデ。自然釉のため調整不詳。	砂粒少量。白色粒子・黒色粒子を含み、黒灰色を呈し、焼成は良好。焼歪みあり。		口縁部~1/3 残存	灰原E-8	
第18図	95	蓋杯身	9.6	3.7			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒微量。角閃石を含み、灰白色を呈し、焼成は不良。		ほぼ完形、 口縁部一部 欠損	灰原D-6	
第18図	96	蓋杯身	11.8	2.5			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。	砂粒少量。長石を少量、黒色破裂痕を含み、青灰色を呈し、焼成は良好。		口縁部1/2残存	灰原C-6	外面に自然釉付着
第18図	97	蓋杯身	9.6	3.2			内面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒少量。角閃石をわずか、白色粒子を少量含み、暗灰色を呈し、焼成は堅緻。		ほぼ完形、 口縁部わず かに欠損	灰原C-5	
第18図	98	杯身	10.1	3.8			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	黒色粒子を含み、灰白色を呈し、焼成は不良。		ほぼ完形	灰原D-7	
第18図	99	蓋杯身	9.8	3.4			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。	砂粒少量。長石少量、黒色破裂痕を含み、暗灰色を呈し、焼成は良好。		受部3/4残存	灰原C-6	外面に自然釉付着
第18図	100	蓋杯身	(10.4)				内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。	角閃石を多量に含み、灰白色を呈し、焼成はやや脆弱。			灰原C-6	
第18図	101	蓋杯身	10.6	3.1			内面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒少量。白色粒子を少量含み、淡灰色を呈し、焼成は通有。		1/2残存	灰原B-6	
第18図	102	蓋杯身	10.4				内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後ヘラ調整。	角閃石・黒色粒子を少量、白色粒子を多量に含み、灰色を呈し、焼成は堅緻。		口縁部~ 体部1/4残存	灰原C-7	
第18図	103	蓋杯身	10.3	3.0			内外面横ナデ。天井部回転ヘラ切り後ナデ。	砂粒少量。長石わずか、黒色粒子を多量に含み、灰色を呈し、焼成は堅緻。	内面 IV類	口縁部2/3残存	灰原E-7・9	外面に自然釉付着
第18図	104	蓋杯身	11.9	3.1			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	角閃石をやや多量に含み、灰白色を呈し、焼成はやや不良。			灰原C-6	
第18図	105	蓋杯身	9.2	2.7			小型。内外面横ナデ。自然釉のため、底部の切離し技法不詳。	砂粒少量。長石を少量含み、灰色・暗灰色を呈し、焼成は堅緻。		1/3残存	灰原D-6	外面に自然釉付着
第18図	106	蓋杯身	9.6	3.5			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒微量。灰白色を呈し、焼成は不良。		2/3残存	灰原D-6	
第18図	107	蓋杯身	9.6	2.9			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒少量。白色細砂・黒色破裂痕を少量含み、灰色を呈し、焼成は良好。		1/4残存	灰原D-7	
第18図	108	蓋杯身	9.8	3.5			小型。内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り	精緻。角閃石を含み、白灰色を呈し、焼成はやや不良。		4/5残存	灰原D-7	
第18図	109	蓋杯身	10.0	2.8			内面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒少量。黒色破裂痕、角閃石を少量含み、暗灰色を呈し、焼成は良好。		3/4残存	灰原B-5	
第18図	110	蓋杯身	10.0	2.7			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。	長石細粒・白色砂粒を若干含み、黒灰色を呈し、焼成は良好。		口縁部1/8残存	灰原E-11	外面に自然釉付着

表16 穂屋1号窯跡遺物観察表(6)

※表中の「蓋杯」は西分類(p.69注1)の杯Hを示す。

図版番号	遺物番号	器種	大きさ(cm)				形態・整形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	へら記号	残存度	出土位置		備考
			口径	器高	底径(脚部)	胴部最大径					遺構名等		
第18図	111	蓋杯身	(10.2)	(2.5)			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。	砂粒多量。長石を少量含み、青灰色を呈し、焼成はやや不良。焼歪みあり。		1/6残存	灰原D-8	外面に自然釉付着	
第18図	112	蓋杯身	10.6	3.4			内面横ナデ。外面自然釉のため調整不詳。底部回転ヘラ切り。	精緻。角閃石・長石を含み、青灰色(外面は黒色)を呈し、焼成は堅緻。		1/4残存	灰原E-7	外面は自然釉付着	
第18図	113	蓋杯身	11.0	3.4			内面横ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。	砂粒少量。白色粒子を少量含み、灰色を呈し、焼成は良好。		1/4残存	灰原B-6		
第18図	114	蓋杯身	11.0	3.1			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。	砂粒微量。長石を少量含み、灰色を呈し、焼成は良好。		口縁部1/5残存	灰原D-8	外面は摩滅している。外面に自然釉付着	
第18図	115	蓋杯身	10.1	2.8			内外面横ナデ。天井部回転ヘラ切り。	砂粒少量。角閃石・長石を少量含み、灰色を呈し、焼成は堅緻。		3/4残存	灰原D-6		
第18図	116	蓋杯身	10.0	2.9			内面横ナデ。天井部回転ヘラ切り後ナデ。	砂粒微量。黄橙色を呈し、焼成は不良。		2/3残存	灰原B-4、C-4		
第18図	117	蓋杯身	10.3				内外面横ナデ。	砂粒多量。長石を少量含み、暗灰色を呈し、焼成は良好。二次焼成。		口縁部1/3残存	灰原D-10	内外面に自然釉付着	
第18図	118	蓋杯身	10.6	2.9			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。	砂粒少量。長石を少量含み、青灰色を呈し、焼成は良好。		口縁部1/4残存	灰原D-8	外面に自然釉付着	
第18図	119	蓋杯身	9.8	(3.0)			外面自然釉のため調整不詳。内面横ナデ。	砂粒微量。黒色破裂痕を含み、暗灰色を呈し、焼成は良好。		1/4残存	灰原D-10		
第18図	120	蓋杯身	10.5	3.1			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。	砂粒少量。長石を少量含み、青灰色を呈し、焼成は良好。		口縁部1/5残存	灰原D-10		
第18図	121	蓋杯身	11.0	(3.1)			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒少量。明灰褐色を呈し、焼成はやや不良。		1/3残存	灰原E-11		
第18図	122	蓋杯身	(11.4)				内外面横ナデ。底部自然釉のため調整不詳。	砂粒少量。黒色粒子含み、明灰色を呈し、焼成はやや不良。		口縁部~1/6残存	灰原E-8	外面に自然釉付着	
第18図	123	蓋杯身	11.3	3.4			内面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒少量。灰白色を呈し、焼成は不良。		1/4強残	灰原D-10		
第18図	124	蓋杯身	12.2	(4.5)			内外面横ナデ。底部ヘラ調整。	砂粒多量。角閃石を含み、灰白色を呈し、焼成は不良。		1/3残存	灰原E-8		
第18図	125	蓋杯身	10.3	3.3			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。	砂粒少量。長石を少量含み、灰色を呈し、焼成は通有。二次焼成。	内面IV類	口縁部1/3片	灰原C-6		
第19図	126	蓋杯身	9.7	3.5			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	黒灰色粒子を含み、灰白色を呈し、焼成は不良。		1/2残存	灰原D-6・7		
第19図	127	蓋杯身	9.6	3.4			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	角閃石・黒色粒子含み、灰白色を呈し、焼成は堅緻であるが不良。		4/5残存	灰原D-7		
第19図	128	蓋杯身	10.1	3.0			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒少量。白色砂粒を若干含み、灰色を呈し、焼成は良好。	内面VII類		灰原B-4		
第19図	129	蓋杯身	9.2	3.0			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後ヘラ調整。	砂粒少量。青灰色を呈し、焼成は堅緻で良好。	外面VII類	3/4残存	灰原C-4、B-4		
第19図	130	蓋杯身	9.8	3.1			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。	砂粒少量。白色砂粒を若干含み、暗灰色を呈し、焼成は良好。		4/5残存	灰原B-4	外面に自然釉付着	
第19図	131	蓋杯身	10.1	3.1			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。	砂粒少量。角閃石・長石を少量含み、灰白色を呈し、焼成は不良。	内面I類	口縁部2/3残存	灰原C-6 No.14		
第19図	132	蓋杯身	10.0				内外面横ナデ。天井部自然釉のため、調整不詳。	砂粒少量。黒色破裂痕を含み、青灰色~黒灰色を呈し、焼成は良好。		1/2残存	灰原E-10	外面に自然釉付着	

表17 穂屋1号窯跡遺物観察表(7)

※表中の「蓋杯」は西分類(p69注1)の杯Hを示す。

図版 番号	遺物 番号	器種	大きさ(cm)				形態・整形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	ヘラ 記号	残存度	出土位置		備考
			口径	器高	底径 (脚部)	胴部 最大径					遺構名等		
第19図	133	蓋杯身	11.0	3.6			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。	砂粒少量。長石を少量含み、青灰色を呈し、焼成は良好。		口縁部1/4残存	灰原C-6		
第19図	134	蓋杯身	8.0	1.9			外面自然釉のため、調整不詳。内面横ナデ。	砂粒少量。長石を少量含み、暗灰色を呈し、焼成は良好。		口縁部1/4残存	灰原D-8	外面に自然釉付着	
第19図	135	蓋杯身	8.3	2.7			自然釉のため、外面の調整不詳。内面横ナデ。	砂粒少量。灰色を呈し、焼成はやや不良。焼歪みあり。		1/3残存	灰原E-9	外面全体に自然釉付着	
第19図	136	蓋杯身	8.9	3.3			内面横ナデ。底部不定方向ヘラナデ。	砂粒少量。灰白色を呈し、焼成は良好。		4/5残存	灰原D-6		
第19図	137	蓋杯身	(9.4)				内外面横ナデ。	砂粒少量。黒色粒子を含み、灰色を呈し、焼成は良好。			灰原E-9		
第19図	138	蓋杯蓋	9.1	2.7			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	長石を含み、灰白色を呈し、焼成は不良。		1/8残存	灰原F-9		
第19図	139	蓋杯身	(10.0)	3.4			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒少量。黒色破裂痕を含み、暗灰色を呈し、焼成は良好。		1/2残存	灰原E-9・10	外面に自然釉付着	
第19図	140	蓋杯身	10.2				外面自然釉のため調整不詳。内面横ナデ。	砂粒少量。暗灰色を呈し、焼成は良好。		口縁部片	灰原E-9、F-11	外面に自然釉付着	
第19図	141	蓋杯身	10.4	3.1			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。	砂粒少量。角閃石・長石を少量含み、灰白色を呈し、焼成は不良。		口縁部～底部3/4残存	灰原D-6		
第19図	142	蓋杯身	10.5	3.1			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。	砂粒微量。長石を少量含み、暗灰色を呈し、焼成は良好。		口縁部1/4残存	灰原C-6		
第19図	143	蓋杯身	10.3	3.3			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。	砂粒少量。黒色破裂痕を少量含み、灰白色を呈し、焼成は不良。		口縁部～底部1/2残存	灰原D-8、E-9		
第19図	144	蓋杯身	11.0	2.7			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	角閃石を含み、暗青灰色を呈し、焼成は良好。		1/5残存	灰原F-8		
第19図	145	蓋杯身	9.4	3.2			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。	砂粒少量。黒色破裂痕を含み、青灰色を呈し、焼成は良好。焼歪みあり。	内面IV類	口縁部～1/2残存	灰原E-7		
第19図	146	蓋杯身	11.1	3.3			内外面横ナデ。底部多方向のヘラ削り調整。	砂粒少量。黒色破裂痕・白色細砂を少量含み、焼成は良好。焼歪みあり。	内面VIII類	口縁部～底部3/4残存	灰原D-10		
第19図	147	蓋杯身	(9.1)	2.8			内外面横ナデ。底部自然釉のため調整不詳。	砂粒少量。白色粒子・黒色粒子を含み、灰色を呈し、焼成は良好。		口縁部～1/6残存	灰原E-8	外面に自然釉付着	
第19図	148	杯身	9.6	3.1			小型。立上りが短い。内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒少量。焼成は堅緻だがやや不良。	内面II類	3/4残存	灰原C-4		
第19図	149	蓋杯身	9.1	2.8			内面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒少量。暗茶褐色を呈し、焼成は良好。焼歪みあり。		9/10残存	灰原D-5・6		
第19図	150	蓋杯身	9.0	2.5			内外面横ナデ。天井部回転ヘラ切り。	砂粒少量。淡灰色を呈し、焼成は良好。		底部のみ一部欠損	灰原E-10		
第19図	151	蓋杯身	(10.8)	3.2			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。	砂粒少量。長石を少量含み、青灰色を呈し、焼成は良好。		口縁部1/4残存	灰原D-8		
第19図	152	蓋杯身	9.3	3.3			小型。内面横ナデ。底部回転ヘラ切り後ヘラ調整。	砂粒少量。石英をわずか、白色粒子・黒色粒子を少量含み、内面は明赤褐色、外面は褐色を呈し、焼成は堅緻であるがやや不良。			灰原C-5		
第19図	153	蓋杯身	9.8	(3.4)			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	黒色粒子を含み、灰白色を呈し、焼成は不良。		ほぼ完形	灰原D-9、D-10	外底にスス付着	
第19図	154	蓋杯身	9.2	3.0			小型。内面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒少量。白色粒子・赤色粒子・黒色粒子を少量含み、灰白色を呈し、焼成は不良。		3/4残存	灰原C-4・5・6		

表18 穂屋1号窯跡遺物観察表(8)

※表中の「蓋杯」は西分類(p69注1)の杯Hを示す。

図版 番号	遺物 番号	器種	大きさ(cm)				形態・整形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	ヘラ 記号	残存度	出土位置 遺構名等	備考
			口径	器高	底径 (脚部)	胴部 最大径						
第20図	155	蓋杯身	10.0	3.5			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒少量。暗灰色を呈し、焼成は良好。二次焼成。焼歪みあり。	外面 VI類	3/4残存	灰原F-10	外内面に自然釉付着
第20図	156	蓋杯身	10.1	2.9	5.3		内面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒微量。灰褐色を呈し、焼成は良好。		4/5残存	灰原B-4	
第20図	157	蓋杯身	10.4	3.1			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒少量。白色粒子を含み、明灰色を呈し、焼成は良好。		1/4残存	灰原E-7、 F-6	
第20図	158	蓋杯身	(10.4)	(2.9)			内面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒微量。暗灰色を呈し、焼成は良好。			灰原D-7	外面に自然釉付着
第20図	159	蓋杯身	10.5	2.8			内面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	白色砂粒若干、黒色破裂痕、白色粒子を少量含み、灰色を呈し、焼成は良好。		1/4残存	灰原D-10	
第20図	160	蓋杯身	(10.3)				内面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒微量。黒色破裂痕を含み、暗灰色を呈し、焼成は良好。		1/5残存	灰原D-9	外面に自然釉付着
第20図	161	蓋杯身	10.9	3.9			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。	砂粒少量。灰白色を呈し、焼成は不良。		1/2残存	灰原E-9	
第20図	162	蓋杯身	11.2	(3.0)			内面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒少量。灰褐色を呈し、焼成は通有。		1/3残存	灰原D-10	
第20図	163	蓋杯身	8.8	2.1			小型。内外面横ナデ。	砂粒少量。長石を少量含み、灰色を呈し、焼成は堅緻。		1/4残存	灰原C-7	
第20図	164	杯身	(9.0)				内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒少量。白色粒子を含み、青灰色を呈し、焼成は良好。			灰原E-8	
第20図	165	蓋杯身	9.4	2.7			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒少量。長石を少量含み、暗灰色を呈し、焼成は堅緻。		1/2残存	灰原D-11	
第20図	166	蓋杯身	9.1	(3.0)			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒少量。白色粒子含み、淡灰色を呈し、焼成はやや不良。		口縁部～底部 1/4残存	灰原E-9	外面に自然釉付着
第20図	167	蓋杯身	(9.9)				内面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒を少量。灰色を呈し、焼成は良好。二次焼成。		1/5残存	灰原D-9	外面に自然釉付着
第20図	168	蓋杯身	10.2	3.1			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	白色粒子を少量、黒色粒子を多量含み、灰白色を呈し、焼成はやや不良。		1/6残存	灰原B-4 No.15	
第20図	169	蓋杯身	10.2	3.0			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。	砂粒多量。黒色破裂痕を含み、灰色を呈し、焼成は良好。		口縁部1/3 残存	灰原D-10	外面に自然釉付着
第20図	170	蓋杯身	10.4	3.4			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	黒色粒子を含み、内面は淡橙褐色、外面は淡灰褐色を呈し、焼成は堅緻であるが不良。		1/2残存	灰原C-7、 D-9	
第20図	171	蓋杯身	10.5	2.5			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。	砂粒少量。白色粒子を少量含み、暗灰色を呈し、焼成は堅緻。		口縁部1/5残存	灰原E-10	外面に自然釉付着
第20図	172	蓋杯身	10.8	3.2	9.6		内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。	砂粒少量。長石を少量含み、青灰色を呈し、焼成は良好。		口縁部1/3残存	灰原C-6	
第20図	173	蓋杯身	10.4		9.0		内面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒若干。暗灰色を呈し、焼成は良好。		1/8残存	灰原D-9	外面に自然釉付着
第20図	174	蓋杯身	10.8	3.0	(13.8)		内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒少量。長石を少量含み、暗灰色を呈し、焼成は堅緻。		1/8残存	灰原E-5	
第20図	175	蓋杯身	(10.8)	(2.8)			内面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒少量。黒色破裂痕を含み、灰色を呈し、焼成は良好。焼歪み顕著。		2/3残存	灰原D-6	外面に自然釉付着
第20図	176	蓋杯身	11.1	3.0			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒少量。角閃石を少量含み、灰色を呈し、焼成は堅緻。		完形	灰原C-6	口縁部内面に自然釉付着

表19 穂屋1号窯跡遺物観察表(9)

※表中の「蓋杯」は西分類(p69注1)の杯Hを示す。

図版 番号	遺物 番号	器種	大きさ(cm)				形態・整形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	ヘラ 記号	残存度	出土位置 遺構名等	備考
			口径	器高	底径 (脚部)	胴部 最大径						
第20図	177	蓋杯身	9.4	3.1			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。	砂粒少量。白色粒子を含み、暗灰色(部分的に黒変)を呈し、焼成は良好。焼歪みあり。	内面	口縁部～底部3/4残存	灰原D-6	
第20図	178	蓋杯身	12.2	3.8			大型。内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後、ナデ。	角閃石を多量に含み、黄灰色を呈し、焼成は堅緻。		底部ほぼ完形	灰原C-5	
第20図	179	蓋杯身		2.2			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後、ナデ。	砂粒少量。角閃石・黒色粒子を少量含み、灰色を呈し、焼成は堅緻。		口縁部破片	灰原E-10	外面に自然釉付着
第20図	180	蓋杯身		2.7			自然釉のため、外面の調整不詳。内面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒少量。白色粒子含み、淡灰色～黒灰黄色を呈し、焼成は良好。		1/5残存	灰原E-9	外面全体に自然釉付着
第20図	181	杯身					内面横ナデ。	精緻。角閃石・長石を含み、青灰色を呈し、焼成は堅緻。		1/8残存	灰原E-7	
第20図	182	蓋杯身		2.5			内外面横ナデ。自然釉のため、底部切離し技法不詳。	砂粒少量。白色粒子を少量含み、灰色を呈し、焼成は堅緻。		口縁部破片	灰原E-10	外面に自然釉付着
第21図	183	杯蓋	(10.4)	3.4			つまみと内面に返り。内外面横ナデ。天井部外面に回転ヘラ削り。つまみ周辺は横ナデ。	精緻。長石を含み、白灰色を呈し、焼成はやや不良。		約1/2残存	灰原D-10	
第21図	184	杯蓋	9.7	3.1			乳頭状のつまみ。内外面横ナデ。天井部回転削り。	砂粒少量。青灰色を呈し、焼成は良好。		完形	灰原E-10	
第21図	185	杯蓋	10.1	2.8			外面自然釉のため調整不詳。内面横ナデ。	砂粒少量。黒色破裂痕・白色細砂を少量含み、暗灰色～灰色を呈し、灰白色の自然釉付着。焼成は良好。		天井部～口縁部1/2残存	灰原D-10	内外面に自然釉付着
第21図	186	杯蓋	10.6	3.1			内面横ナデ。天井部回転ヘラ削り。	砂粒微量。灰白色を呈し、焼成は不良。		9/10残存	灰原B-4	
第21図	187	杯蓋	9.7	2.6			やや低平なつまみ。内面横ナデ。自然釉のため、外面調整不詳。	砂粒少量。黒灰色を呈し、焼成はやや不良。		口縁部～つまみ部残存	灰原E-11	外面に自然釉付着
第21図	188	杯蓋	(9.0)	2.9			内外面横ナデ。天井部自然釉のため、調整不詳。	砂粒少量。黒灰色を呈し、焼成は良好。二次焼成。		1/3残存	灰原E-11	外面に自然釉付着
第21図	189	杯蓋	13.8	3.3			つまみ周辺ナデ。天井部回転ヘラ削り。内外面横ナデ。	砂粒少量。暗灰色を呈し、焼成は良好。	内面IV類	4/5残存	灰原E-9	
第21図	190	杯蓋	9.8	2.5			内面横ナデ。天井部回転ヘラ削り。つまみ周辺ナデ。	砂粒少量。灰色を呈し、焼成は良好。		完形	灰原D-5	
第21図	191	杯蓋	10.8	2.3			低平なつまみ。内外面横ナデ。天井部回転削り。	砂粒少量。黒色破裂痕を含み、焼成は良好。		天井部～口縁部1/2残存	灰原D-7	
第21図	192	杯蓋	8.9	2.9			内外面横ナデ。天井部回転削り。	角閃石・白色粒子を多量に含み、灰色を呈し、焼成はやや良好。		1/3残存	灰原C-4	
第21図	193	杯蓋	10.0	2.6			つまみ周辺ナデ。天井部回転ヘラ削り。内外面横ナデ。	砂粒少量。角閃石・白色粒子を少量含み、灰色を呈し、焼成は良好。	内面IV類	1/4残存	灰原D-7	外面に自然釉付着
第21図	194	杯蓋	10.5	2.0			外面自然釉のため調整不詳。内面横ナデ。	黒色粒子を含み、灰色を呈し、焼成は良好。	内面IX類	1/2残存	灰原D-10	内外面に自然釉付着
第21図	195	杯蓋	11.6	2.8			外面自然釉のため、調整不詳。内面横ナデ、ナデ。	黒色粒子を含み、灰色を呈し、焼成は良好。		1/2残存	灰原D-10	外面に自然釉付着
第21図	196	杯蓋	9.4	2.5			つまみと内面に返り。内外面横ナデ。外面自然釉のため調整不詳。	砂粒少量。白色粒子をわずか、黒色粒子を多量に含み、灰色を呈し、焼成は堅緻(やや不良)。	内面V類	1/3残存	灰原C-5	内外面に自然釉付着
第21図	197	杯蓋	11.6	2.1			内外面横ナデ。天井部自然釉のため調整不詳。	白色粒子少量、黒色破裂痕を含み、灰色を呈し、焼成は良好。二次焼成。	内面IV類		灰原C-6、D-5、E-11	外面に自然釉付着
第21図	198	杯蓋	10.0	2.4			内外面横ナデ。	白色粒子若干含み、暗灰色を呈し、焼成は良好		1/3残存	灰原E-7	

表20 穂屋1号窯跡遺物観察表(10)

※表中の「蓋杯」は西分類(p.69注1)の杯Hを示す。

図版 番号	遺物 番号	器種	大きさ(cm)				形態・整形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	ヘラ 記号	残存度	出土位置	
			口径	器高	底径 (脚部)	胴部 最大径					遺構名等	備考
第21図	199	杯蓋	10.0	2.5			内外面横ナデ。天井部外面自然釉のため調整不詳。	砂粒。白色砂粒を少量含み、明淡灰色を呈し、焼成は良好。		1/3残存	灰原E-8	外面に自然釉付着
第21図	200	杯蓋	10.3	2.0			低平なつまみ。内外面横ナデ。天井部回転削り。	砂粒少量。淡灰色～黒灰色を呈し、焼成は良好。		1/4残存	灰原E-11	外面に自然釉付着
第21図	201	杯蓋	12.6	2.1			内面横ナデ。天井部回転ヘラ削り。つまみ周辺ナデ。	砂粒少量。にぶい橙灰色を呈し、焼成は不良。		4/5残存	灰原B-4	
第21図	202	杯蓋					乳頭状のつまみ。内面横ナデ。天井部回転ヘラ削り。	砂粒微量。暗灰色～黒色を呈し、焼成は良好。			灰原D-9	外面に自然釉付着
第21図	203	杯蓋					内外面横ナデ。	石英を含み、外面は淡灰色、内面は黒色を呈し、焼成は良好。二次被熱?	内面II類	3/4残存	灰原C-8	
第21図	204	杯蓋					内外面横ナデ。天井部自然釉のため調整不詳。	砂粒少量。黒色破裂痕を含み、灰色を呈し、焼成は良好。二次焼成。	内面V類		灰原E-8	外面全体に自然釉付着
第21図	205	杯蓋					ボタン状つまみ、周辺ナデ。内面横ナデ。外面自然釉のため調整不詳。	砂粒少量。淡灰色を呈し、焼成は良好。	内面	つまみ部～天井部破片	灰原上面E-9	
第21図	206	杯蓋					内面横ナデ。天井部回転ヘラ削り。	砂粒微量。灰色を呈し、焼成は良好。		1/6残存	灰原D-9	
第21図	207	杯蓋					つまみは低平。外面自然釉のため調整不詳。内面横ナデ。	砂粒微量。灰色を呈し、焼成は良好。		破片	灰原E-7	内外面に自然釉付着
第21図	208	杯蓋	11.2				内外面横ナデ。天井部自然釉のため調整不詳。	砂粒少量。黒色破裂痕を含み、灰色を呈し、焼成は良好。	内面	1/2残存	灰原F-9	外面に自然釉付着
第21図	209	杯蓋	8.8				内外面横ナデ。天井部自然釉のため調整不詳。	砂粒少量。長石を少量含み、灰色を呈し、焼成は良好。		口縁部1/4残存	灰原D-10	外面に自然釉付着
第21図	210	杯蓋	(8.0)				内外面横ナデ。天井部自然釉のため調整不詳。	砂粒少量。白色粒子含み、黒灰色を呈し、焼成は良好。		1/5残存	灰原E-9	外面全体に自然釉付着
第21図	211	杯蓋					つまみは低い擬宝珠。天井部に凸線。内外面横ナデ。	砂粒少量。黒色破裂痕・白色細砂を少量含み、灰色を呈し、焼成は良好。		つまみ部～天井部3/4残存	A・B-3(水田)	
第22図	212	杯蓋	9.0				内外面横ナデ。天井部回転削り。	黒色粒子を少量含み、灰色を呈し、焼成は堅緻。		1/4残存	灰原C-5	
第22図	213	杯蓋	(11.0)				内面横ナデ。天井部回転ヘラ削り。	白色砂粒若干含み、灰色を呈し、焼成は良好。		1/5残存	灰原D-10	
第22図	214	杯蓋	(10.8)				内外面横ナデ。	砂粒多量。長石を少量含み、青灰色を呈し、焼成は良好。二次焼成。		口縁部1/8残存	灰原D-8	内外面に自然釉付着
第22図	215	杯蓋	8.9				内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒少量。角閃石・長石を少量含み、灰白色を呈し、焼成は堅緻。		1/5残存	灰原D-11	
第22図	216	杯蓋	(14.0)				内外面横ナデ。天井部外面回転ヘラ削り。	白色砂粒少量、角閃石を極少量含み、淡灰色を呈し、焼成はやや良好。		1/6残存	灰原D-10	
第22図	217	杯蓋	14.4				内外面横ナデ。	白色粒子をやや多量含み、暗灰色を呈し、焼成は良好。		1/6残存	灰原D-7	
第22図	218	杯蓋	8.6				内外面横ナデ。天井部回転ヘラ削り。	砂粒少量。長石少量を含み、暗灰色を呈し、焼成は良好。		口縁部1/3残存	灰原E-11	外面に自然釉付着
第22図	219	杯蓋	7.8				内面横ナデ。自然釉のため、外面調整不詳。	砂粒少量。白色粒子をわずか、黒色粒子少量を含み、灰色を呈し、焼成は堅緻。		口縁部1/7残存	灰原E-10	外面に自然釉付着
第22図	220	杯蓋	8.6				内外面横ナデ。天井部回転ヘラ削り。	砂粒少量。長石・白色粒子・黒色粒子を少量含み、内面は灰色、外面は灰色～暗灰色を呈し、焼成は堅緻。		口縁部1/6残存	灰原E-10	外面に自然釉付着

表21 穂屋1号窯跡遺物観察表(11)

※表中の「蓋杯」は西分類(p69注1)の杯Hを示す。

図版 番号	遺物 番号	器種	大きさ(cm)				形態・整形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	ヘラ 記号	残存度	出土位置 遺構名等	備考
			口径	器高	底径 (脚部)	胴部 最大径						
第22図	221	杯蓋	(11.2)				内面横ナデ。	白色砂粒を若干含み、灰色を呈し、焼成は良好。焼歪みあり。	外面I類?	1/5残存	灰原D-9	
第22図	222	杯蓋	13.8	(1.3)			内外面横ナデ。天井部回転ヘラ削り。	長石を極小、白色粒子を含み、黒灰色を呈し、焼成は良好。		1/5残存	灰原D-6	
第22図	223	杯蓋	(9.0)				内外面横ナデ。天井部自然釉のため調整不詳。	砂粒少量。黒色破裂痕を含み、青灰色を呈し、焼成は良好。焼歪みあり。		口縁部~1/6残存	灰原E-8	外面に自然釉付着
第22図	224	杯蓋	12.2				内外面横ナデ。天井部回転ヘラ削り。	砂粒少量。暗茶褐色を呈し、焼成は堅緻(やや不良)。		3/5残存	灰原G-8	
第22図	225	杯蓋	10.0				内面横ナデ。自然釉のため、外面調整不詳。	砂粒少量。白色粒子・黒色粒子を少量含み、灰色を呈し、焼成は堅緻。		口縁部1/7残存	灰原E-10	外面全体に自然釉付着
第22図	226	杯蓋	(12.5)				内面横ナデ。天井部回転ヘラ削り。	砂粒微量。明灰色を呈し、焼成は不良。		1/5残存	灰原D-10	
第22図	227	杯身	8.7	3.3			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒少量。淡灰色を呈し、焼成はやや不良。		完形。口縁部の一部欠損	灰原B-4	
第22図	228	杯身	8.9	4.0			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	角閃石を少量を含み、灰色を呈し、焼成は堅緻。		口縁部1/4残存、底部1/3残存	灰原B-5	
第22図	229	杯身	9.0	3.7			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。	砂粒若干。橙色を呈し、焼成は不良。		3/4残存	灰原F-8・9・12、G-8	
第22図	230	杯身	9.2	3.8			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	黒色粒子を含み、淡褐色を呈し、焼成は不良。二次焼成。		1/2残存	灰原D-11	
第22図	231	杯身	10.0	3.8			内外面横ナデ。天井部回転ヘラ切り。	砂粒少量。長石を少量含み、灰色を呈し、焼成は堅緻。	内面VIII類	3/4残存	灰原C-6	
第22図	232	杯身	9.8	4.5			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ調整。	砂粒微量。暗灰色を呈し、焼成は良好。		1/3残存	灰原E-8	
第22図	233	杯身	8.8	4.8			内面横ナデ。	砂粒少量。石英・白色粒子を少量含み、灰色~暗灰色を呈し、焼成は堅緻。焼歪み。	内面XI類	ほぼ完形、口縁部わずかに欠損	灰原C-5	
第22図	234	杯身	9.4	3.6			内面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒微量。明灰色を呈し、焼成は良好。		1/2残存	灰原C-6、D-5・6	
第22図	235	杯身	9.5	3.9			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	白色粒子を含み、暗灰青色・黒灰色を呈し、焼成は良好。		1/2残存	灰原D-7	
第22図	236	杯身	9.5	4.4			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り	砂粒少量、角閃石を含む。暗灰色を基調。焼成は堅緻。二次焼成。		口縁部1/2残存、底部完形	灰原D-7	内面に自然釉付着
第22図	237	杯身	(9.0)	(3.8)			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒少量。黒色破裂痕を含み、灰色を呈し、焼成は良好。		1/4残存	灰原D-7	内外面に自然釉付着
第22図	238	杯身	9.5	3.9			内外面横ナデ。底部回転ヘラ削り。	精緻。白灰色を呈し、焼成は堅緻だがやや不良。		4/5残存	灰原C-5、D・E-7	
第22図	239	杯身	9.9	4.1			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	白色粒子を含み、外面は暗灰色、内面は灰色を呈し、焼成は良好。		1/4残存	灰原D-8	外面に自然釉付着
第22図	240	杯身	9.9	4.4			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒少量。角閃石・長石を少量含み、灰色を呈し、焼成はやや不良。		口縁部~底部2/3残存	灰原D-6	
第22図	241	杯身	10.1	4.0			外面自然釉のため調整不詳。内面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	黒色粒子を含み、外面は暗灰色、内面は灰色を呈し、焼成は良好。		ほぼ完形	灰原D-9・12	外面に自然釉付着
第22図	242	杯身	10.2	4.3			内外面横ナデ。底部自然釉のため調整不詳。	砂粒少量。黒色破裂痕・白色細砂を少量含み、外面は灰色、内面は黒色を呈し、焼成は良好。		口縁部~底部1/4残存	灰原D-9	外面に自然釉付着

表22 穂屋1号窯跡遺物観察表(12)

※表中の「蓋杯」は西分類(p69注1)の杯Hを示す。

図版 番号	遺物 番号	器種	大きさ(cm)				形態・整形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	へら 記号	残存度	出土位置 遺構名等	備 考
			口径	器高	底径 (脚部)	胴部 最大径						
第22図	243	杯身	10.6	4.4			内外面横ナデ。底部回転へら切り。	砂粒少量。長石を少量含み、暗灰色を呈し、焼成は堅緻。		2/3残存	灰原C-6	体部内面に自然釉付着
第22図	244	杯身	10.7	3.9			内外面横ナデ。底部回転へら切り。	白色粒子・黒色粒子を含み、外面は暗灰色、内面は灰色を呈し、焼成は良好。		1/2残存	灰原D-10	外面に自然釉付着
第22図	245	杯身	10.7	4.5			内外面横ナデ。底部外面、自然釉のため調整不詳。	砂粒少量。白色粒子を含み、黒灰色を呈し、焼成は良好。歪みあり。	外面 XII類	口縁部1/2 残存～底部 完存	灰原D-7	
第22図	246	杯身	10.5	4.7			内外面横ナデ。底部回転へら切り後へら調整。	砂粒少量。角閃石・長石を含み、白灰色を呈し、焼成は不良。		1/2残存	灰原E-8・9、 F-10	
第22図	247	杯身	10.6	5.0			内面横ナデ。自然釉のため、外面調整不詳。	砂粒少量。暗灰色～灰黄色を呈し、焼成は堅緻。		3/4残存	灰原D-6、 E-7・8、G-8	外面に自然釉付着
第23図	248	杯身	11.9	5.0			内外面横ナデ。底部回転へら切り。底部内面に指ナデ。	砂粒少量。明灰色を呈し、焼成は通有。		口縁部～底部 3/4残存	灰原D-6	
第23図	249	高杯	11.8				内外面横ナデ。	精緻。長石を含み、青灰色を呈し、焼成は堅緻。		杯部1/3残存	灰原D-8、 F-10	
第23図	250	杯身	13.5				内外面横ナデ。底部回転へら切り。	砂粒少量。灰黄色を呈し、焼成は良好。		口縁部～底部 3/4残存	灰原E-10	
第23図	251	杯身	17.7	6.0			内外面横ナデ。底部回転へら切り。	黒色粒子を含み、暗灰色を呈し、焼成は良好。		1/2残存	灰原D-5・ 10、E-9	内外面に自然釉付着
第23図	252	杯身	9.2	2.8			内外面横ナデ。底部回転へら削り。	砂粒少量。白色粒子・黒色粒子を含み、暗灰色を呈し、焼成は良好。		3/4残存	灰原D-7	
第23図	253	杯身	9.9	3.2			内外面横ナデ。底部回転へら切り後、手持ちのへら削り調整。底部に一方のへら痕。	砂粒多量。黒色粒子を多量に含み、暗灰色を呈し、焼成は良好。		口縁部～底部 3/4残存	灰原D-6	
第23図	254	杯身	10.4	3.8			内外面横ナデ。底部丁寧なへらナデ調整。	砂粒少量。黒色破裂痕をわずかに含み、灰色を呈し、焼成は良好。		口縁部～底部 1/3残存	灰原D-11、 E-12	
第23図	255	杯身	(10.6)	3.5			内外面横ナデ。底部自然釉のため、調整不詳。	砂粒少量。黒色破裂痕を含み、灰色を呈し、焼成は良好。焼歪みあり。			灰原E-9	
第23図	256	杯身	11.1				内外面横ナデ。	砂粒少量。長石を少量含み、灰色を呈し、焼成は堅緻。		1/5残存	灰原E-8	
第23図	257	椀	(9.5)				内外面横ナデ。	砂粒少量。長石を少量含み、青灰色を呈し、焼成は良好。		口縁部～1/4 残存	灰原E-8	
第23図	258	椀	9.9				内外面横ナデ。	砂粒多量。長石を少量含み、灰色を呈し、焼成は良好。二次焼成。	外面 I類?	口縁部1/3残存	灰原D-8、 E-11	内外面に自然釉付着
第23図	259	高台付 杯身	14.9	6.3	8.9		成形はロクロ (外) (内) ヨコナデ	砂粒少量。灰白色を呈し、焼成は良好。		3/4残存	灰原D-9・ 10・11・12	
第23図	260	高台付 杯身	14.0	5.5	8.3		内外面横ナデ。体部下端回転へら削り。	黒色粒子を多量に含み、灰色を呈し、焼成は堅緻。二次焼成。	内面 II類	口縁部1/8 残存、高台 ほぼ完形	灰原C-5、 B-4、E-8、 F-6	高台外面に自然釉付着
第23図	261	高杯	9.9	6.1	7.0		内外面横ナデ。体部下端回転へら削り。	砂粒少量。黒色破裂痕・白色細砂を若干含み、灰色を呈し、焼成は良好。焼歪みあり。	内面 IV類	口縁部～胴部 1/4残存、脚 部一部欠損	灰原D-10	内外面に自然釉付着
第23図	262	高杯	11.0	5.1	7.2		短脚。杯部内外面横ナデ、体部下端回転へら削り。脚部内外面横ナデ。	砂粒少量。青灰色を呈し、焼成は堅緻で良好。		3/4残存	灰原C-4	口唇部に打ち欠き痕。焼歪み。
第23図	263	高杯	10.8	7.0	9.0		内面横ナデ。体部下端回転へら削り。	砂粒少量。暗灰色を呈し、焼成は良好。		1/2残存	灰原D-5・6	外面に自然釉付着
第23図	264	高杯	11.4	6.7	7.3		短脚高杯。内外面横ナデ。	黒色粒子を含み、灰色を呈し、焼成は堅緻。焼歪み。		脚部完形、 口縁部3/4 残存	灰原C-5	

表23 穂屋1号窯跡遺物観察表(13)

※表中の「蓋杯」は西分類(p69注1)の杯Hを示す。

図版 番号	遺物 番号	器種	大きさ(cm)				形態・整形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	ヘラ 記号	残存度	出土位置 遺構名等	備考
			口径	器高	底径 (脚部)	胴部 最大径						
第23図	265	高杯	12.3	6.8	8.3		内外面横ナデ。脚部内面カキ目状調整。		3/4残存	灰原E-5		
第23図	266	高杯	11.5	6.5	7.0		内外面横ナデ。体部下端回転ヘラ削り。	内面IV類	ほぼ完形、杯と高台の一部欠損	灰原B-4		
第23図	267	高杯	13.0	6.5	7.9		内外面横ナデ。		口縁部1/2～脚端部3/4残存	灰原D-6		
第23図	268	高杯	11.1	7.0	7.8		内外面横ナデ。体部下端回転ヘラ削り後ナデ。		口縁部～胴部2/3残存、脚部1/4残存	灰原D-7	外面に自然釉付着	
第23図	269	高杯	(13.3)	(4.7)	9.8		内外面横ナデ。体部下端回転ヘラ削り。	内面VII類	1/4残存	灰原D-7		
第24図	270	高杯	11.3	6.5	7.0		内外面横ナデ。		ほぼ完形、口縁部一部欠損	灰原D-6	内外面に自然釉付着	
第24図	271	高杯	10.8	7.4	8.2		内面横ナデ。		1/2残存	灰原B・C-4		
第24図	272	高杯	11.4	7.1	8.3		短脚高杯。内外面横ナデ。		3/4残存	灰原D-5・6		
第24図	273	高杯	11.8	5.9	7.1		内面横ナデ。体部下端回転ヘラ削り。			灰原E-7・8・9	内面に自然釉付着	
第24図	274	高杯	(11.7)	6.3	6.8		内外面横ナデ。体部下端回転ヘラ削り。			灰原C-6、D-6	内外面に自然釉付着	
第24図	275	高杯	12.5	9.5	10.3		内外面横ナデ。体部下端回転ヘラ削り。		口縁部1/2、底部1/8残存	灰原D-7・10		
第24図	276	高杯	13.0	7.4	8.9		短脚。内外面横ナデ。	内面III類	1/2残存	灰原D-10・11		
第24図	277	高杯	13.3	9.5	9.0		内外面横ナデ。		高台～底部1/3残存、口縁部一部欠損	灰原D-6		
第24図	278	高杯	12.8	12.1	10.8		内外面横ナデ。		3/4残存	灰原G-8		
第24図	279	高杯	13.1	14.4	9.1		内外面横ナデ。体部下端回転ヘラ削り。脚部内面ヘラ削り。		口縁部1/4、底部4/5残存	灰原D-6・7		
第24図	280	高杯	15.6				杯部内外面に横ナデ。脚部外面に横ナデ、内面に絞り痕。		2/3残存	灰原D-5・6、E-7		
第24図	281	高杯	11.9				杯部。内面横ナデ。		2/3残存	灰原B-5		
第24図	282	高杯	11.3				内外面横ナデ。	内面IV類		灰原E-11	内外面に自然釉付着	
第24図	283	高杯	(11.2)				内外面横ナデ。			灰原E-6、F-6	内外面に自然釉付着	
第24図	284	高杯	11.6				内外面横ナデ。体部下端回転ヘラ削り。			灰原B-4	内外面に自然釉付着	
第24図	285	高杯	12.2				高杯の杯部。体部外面に沈線。外内面横ナデ。		杯部1/3残存	灰原E-8		
第24図	286	高杯	11.1				自然釉のため、内外面の調整不詳。		2/3残存	灰原D-7	内外面全体に自然釉付着	

表24 穂屋1号窯跡遺物観察表(14)

※表中の「蓋杯」は西分類(p69注1)の杯Hを示す。

図版番号	遺物番号	器種	大きさ(cm)				形態・整形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	へら記号	残存度	出土位置 遺構名等	備考
			口径	器高	底径(脚部)	胴部最大径						
第24図	287	高杯	(12.0)				長脚。体部下端に回転へら削り。脚部外面に横ナデ、内面に絞り痕。	砂粒少量。白色細砂・黒色破裂痕を少量含み、赤褐色を呈し、焼成は不良。		1/2残存	灰原E-9	
第24図	288	高杯	13.5				高杯の杯部。内外面に横ナデ。	白色粒子を含み、淡赤褐色・暗灰色を呈し、焼成は良好。		口縁部～底部 1/4残存	灰原D-10	
第24図	289	高杯	13.8				杯部。自然釉のため調整不詳。	砂粒少量。白色粒子・黒色粒子を含み、灰色を呈し、焼成は良好。焼歪みあり。		3/4残存	灰原D-7・9、 E-7・10	内外面に 自然釉付着
第25図	290	高杯	14.2				内外面横ナデ。	砂粒少量。白色砂粒を微量含み、暗灰色を呈し、焼成は良好。		1/4残存	灰原D-10	
第25図	291	高杯	(14.8)				内外面横ナデ。体部下端回転へら削り。	砂粒少量。長石・白色細砂を含み、灰色・赤灰色を呈し、焼成は良好。		1/2残存、 脚部欠損	灰原(トレンチ内)	
第25図	292	高杯	21.0				内外面横ナデ。	白色粒子を含み、灰色・黒灰色・暗灰色を呈し、焼成は良好。二次被熱あり。		杯部1/3残存、 脚部欠損	灰原D・ F-7、E-8	
第25図	293	高杯			7.5		内外面横ナデ。体部下端回転へら削り。	砂粒少量。暗灰色を呈し、焼成は良好。			灰原B-4	
第25図	294	高杯			8.5		短脚高杯の脚部。外面横ナデ。	砂粒少量。灰褐色を呈し、焼成は堅緻。二次焼成。		脚部～杯底部、 口縁部欠失。	灰原D-6	内外面に 自然釉付着
第25図	295	高杯			7.8		内外面横ナデ。体部下端へら削り。	砂粒少量。白色粒子・黒色粒子を含み、淡灰色を呈し、焼成は不良。		杯部～脚部 破片	灰原D-7	
第25図	296	高杯			7.2		短脚。内外面横ナデ。	砂粒少量。灰緑褐色を呈し、焼成は堅緻で良好。	内面 Ⅷ類	杯底部～脚部 1/2残存	灰原C-4	脚部内外面、 杯部外面に 自然釉。
第25図	297	高杯			7.9		脚部。内外面横ナデ。	白色砂粒少量、角閃石を多量含み、灰色を呈し、焼成は良好。		3/4残存	灰原D-10	
第25図	298	高杯			7.1		内外面横ナデ。杯部下端回転へら削り。	精緻。角閃石・長石を含み、灰色を呈し、焼成はやや不良。		杯部1/3残存、 脚部完存	灰原E-8	
第25図	299	高杯			8.7		内面横ナデ。底部回転へら切り後へらナデ。	精緻。長石を含み、黄灰色を呈し、焼成はやや不良。		杯底部、脚部 3/4残存	灰原E-10	
第25図	300	高杯			7.7		外面自然釉のため調整不詳。内面横ナデ。	砂粒少量。黒色破裂痕・白色細砂を少量含み、灰色を呈し、黒色・灰白色の自然釉が顕著に付着。焼成は良好。		杯底部～ 脚部2/3残存、 端部1/4残存	灰原D-5	内外面に 自然釉付着
第25図	301	高杯			8.1		高杯脚部。内外面横ナデ。	砂粒少量。角閃石を少量含み、灰白色を呈し、焼成は不良。		杯底部～ 脚部2/3残存、 端部1/2残存	灰原(トレンチ)	
第25図	302	高杯			(9.5)		内外面横ナデ。	砂粒少量。黒色破裂痕を含み、灰色を呈し、焼成は良好。二次焼成。焼歪みあり。		底部～1/4残存	灰原E-9	
第25図	303	高杯			(10.0)		内外面横ナデ。	砂粒少量。角閃石・白色粒子を含み、淡灰白色を呈し、焼成は不良。		杯底部～脚部 1/2残存	灰原E-10	
第25図	304	高杯			12.0		脚部。内外面横ナデ。	砂粒少量。白色細砂を若干含み、青灰色を呈し、焼成は良好。		ほぼ完形、脚 端部一部欠損	灰原D-7	
第25図	305	高杯			11.0		内外面横ナデ。	砂粒少量。暗灰色(断面は茶淡色)を呈し、焼成は通有。		2/3残存	灰原E-7	
第25図	306	高杯			8.1		短脚高杯の脚部。外内面横ナデ。	精緻。白色粒子・黒色粒子を少量含み、オリーブ灰色を呈し、焼成は堅緻。	脚部 外面 Ⅱ類	脚底部完存	灰原C-6	
第25図	307	高杯			8.4		脚部。外面横ナデ。内面絞り痕。	白色粒子を多量、長石を少量含み、暗灰色を呈し、焼成は良好。二次焼成。		脚端部残存	灰原C-6	内外面に 自然釉付着
第25図	308	高杯			10.1		脚部。外面横ナデ。内面絞り痕。	砂粒少量。白灰色を呈し、焼成は良好。		3/4残存	灰原D-6	

表25 穂屋1号窯跡遺物観察表(15)

※表中の「蓋杯」は西分類(p69注1)の杯Hを示す。

図版 番号	遺物 番号	器種	大きさ(cm)				形態・整形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	ヘラ 記号	残存度	出土位置 遺構名等	備考
			口径	器高	底径 (脚部)	胴部 最大径						
第25図	309	高杯					長脚。脚部外面に横ナデ、内面に絞り痕。	砂粒少量。白色細砂・黒色破裂痕を少量含み、灰白色を呈し、焼成はやや不良。		1/2残存	灰原D-7	
第25図	310	高杯			10.8		長脚高杯脚部。内外面横ナデ。脚部内面絞り痕。底部回転ヘラ切り。	砂粒少量。白色粒子を少量含み、青灰色を呈し、焼成は良好。		脚部底1/3残存	灰原B-3	
第25図	311	高杯			8.8		脚部。自然釉のため、内外面の調整不詳。	砂粒少量。暗灰色を呈し、焼成は堅緻。		2/3残存	灰原D-8	内外面に自然釉付着
第25図	312	高杯			10.0		長脚。脚部外面に横ナデ、内面に絞り痕。	砂粒少量。青灰色を呈し、焼成はやや不良。		脚部2/3残存	灰原D-6	
第25図	313	高杯			10.2		長脚高杯脚部。内外面横ナデ。脚部内面絞り痕。底部回転ヘラ切り。	砂粒少量。白色粒子を少量含み、暗青灰色を呈し、焼成は良好。	脚内面III類	杯部底1/6～脚部完形	灰原D-11	
第26図	314	蓋	22.6	4.4			大形蓋。内外面横ナデ。天井部回転ヘラ削り。	砂粒少量。暗灰色を呈し、焼成は堅緻。焼歪み。		3/4残存	灰原C-6	
第26図	315	高杯蓋	(14.6)	5.5			ボタン状のつまみ。器高は高い。内外面横ナデ。天井部回転ヘラ削り。	砂粒少量。長石を少量含み、灰色を呈し、焼成は通有。		口縁部1/3	灰原C-6No.6	
第26図	316	蓋	18.8	3.0			大型。ボタン状のつまみ、内面に返りを持つ。内外面横ナデ。天井部自然釉のため、調整不詳。	砂粒微量。暗灰色を呈し、焼成は良好。			灰原F-7No.11、D-7No.25、C-5、D-5・9・10・11、E-7・9	外面に自然釉付着
第26図	317	蓋	8.3	3.3			短頸壺の蓋?内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。	砂粒少量。石英・角閃石を含み、オリブ灰色を呈し、焼成は良好。		ほぼ完形	灰原E-9No.8	
第26図	318	蓋	11.0	2.1			内外面横ナデ。天井部手持ちのヘラ削り調整。	砂粒少量。灰色を呈し、焼成は良好。焼歪みあり。			灰原E-11	外面に自然釉付着
第26図	319	鉢	(9.0)				内外面横ナデ。	砂粒少量。灰色を呈し、焼成は良好。		1/5残存	灰原D-10	
第26図	320	鉢	9.8				内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	長石を極小、～1大の角閃石を含み、白灰色を呈し、焼成は不良。		1/4残存	灰原D-7	
第26図	321	杯身	9.0	5.5			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。	砂粒多量。角閃石・長石を多量に含み、暗灰褐色を呈し、焼成はやや不良。		底部	灰原F-10	
第26図	322	杯身	9.8	3.0			内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後ヘラ調整。	角閃石・黒色粒子を多量に含み、灰色を呈し、焼成は堅緻。		1/2残存	灰原C-5・6	
第26図	323	鉢	11.0	3.9			小型。内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	白色砂粒を少量、黒色破裂痕を含み、暗灰色を呈し、焼成は良好。		1/4残存	灰原C-6	外面に自然釉付着
第26図	324	鉢	10.8				小型。内外面横ナデ。	黒色粒子を少量を含み、暗灰色を呈し、焼成は堅緻。		口縁部～体部1/4残存	灰原C-6	
第26図	325	鉢	22.0				口縁部付近内外面横ナデ。体部下半斜方向外面ヘラ削り。	角閃石を含み、灰白色を呈し、焼成は不良。		1/4残存	灰原E-9、D・F-11	
第26図	326	鉢	20.6				内外面横ナデ。	砂粒少量。黒色破裂痕・白色細砂を少量含み、暗灰色を呈し、焼成は良好。		口縁部1/4残存	灰原D-7	外面に自然釉付着
第26図	327	土師器 甗					把手。(外)(内)ナデ	砂粒少量。角閃石を多量、長石・白色粒子・赤色粒子を少量含み、におい黄橙色を呈し、焼成は良好。		把手破片	灰原E-10	灰原出土では唯一の土師器
第26図	328	甗					把手。指圧痕、ヘラ状工具による成形痕。	砂粒少量。暗灰色を呈し、焼成は良好。			灰原E-9	
第26図	329	甗			16.6		胴部。外面刷毛後ナデ。内面ナデ。	砂粒少量。角閃石・長石を少量含み、淡灰褐色を呈し、焼成は良好。			灰原D-9、E-8	
第26図	330	杯状土 製品	10.4	4.5			底部にヘラ状工具による穿孔。内面4箇所縦方向1条の櫛描波状文。内外面横ナデ。	砂粒少量。角閃石・長石を少量含み、白灰色を呈し、焼成は不良。			灰原D-6	

表26 穂屋1号窯跡遺物観察表(16)

※表中の「蓋杯」は西分類(p69注1)の杯Hを示す。

図版番号	遺物番号	器種	大きさ(cm)				形態・整形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	ヘラ記号	残存度	出土位置	
			口径	器高	底径(脚部)	胴部最大径					遺構名等	備考
第26図	331	平瓶	7.8	14.0		18.9	外面体部上半にカキ目、下半に横ナデ。内面に同心円当具痕。	砂粒少量。淡灰黄色を呈し、焼成はやや不良。		口縁部1/2欠損、胴部一部欠損	灰原D-10・11、E-9・10	
第26図	332	平瓶	8.9				口頸部内外面に横ナデ。体部外面上部に横ナデ、肩部にカキ目。	黒色粒子を含み、灰色・黒灰色・黒褐色を呈し、焼成は良好。		頸部完形、肩部2/3残存	灰原D-7・10、F-10	外面に自然釉付着
第26図	333	平瓶	8.4				口頸部。内外面横ナデ。	砂粒多量。黒色破裂痕を含み、暗灰色を呈し、焼成は良好。		口縁部2/3残存、頸部破片	灰原D-6・7・10	内外面に自然釉付着
第26図	334	平瓶	6.2				内外面横ナデ。	砂粒少量。白色細砂を含み、灰色を呈し、焼成は良好。		口縁部破片	灰原D-9、E-8	
第26図	335	平瓶	6.0				内外面横ナデ。	砂粒少量。白色粒子・黒色粒子を含み、灰色を呈し、焼成は良好。焼歪みあり。		口縁部完存	灰原E-6	内外面全体に自然釉付着
第27図	336	平瓶				15.0	内外面横ナデ。体部下端回転ヘラ削り。	白色粒子をわずかに含み、外面は黒色・灰青色・暗灰青色を呈し、焼成は良好。		1/2残存、口縁部欠損	灰原D-7・9、E-8、F-10	肩部に自然釉付着
第27図	337	平瓶				15.2	内外面横ナデ。底部ヘラナデ、指頭痕。	砂粒少量。白色粒子を少量含み、暗青灰色を呈し、焼成は良好。		頸部～底部1/3残存	灰原C-5	
第27図	338	平瓶				15.5	内外面横ナデ。底部ヘラナデ。	砂粒少量。角閃石・長石細粒を多量に含み、灰白色を呈し、焼成は不良。		胴部～底部1/2残存	灰原C・D-6・11、F-9	
第27図	339	平瓶				17.8	内外面に横ナデ。外面下半にカキ目。	黒色粒子を含み、灰色・黒灰色を呈し、焼成は良好。		1/3残存	灰原D-6 No.6、D-7、E-7	外面に自然釉付着
第27図	340	平瓶				22.0	外面にカキ目(4～5本/1cm)、沈線。内面に横ナデ、頸部内面に指圧痕。	黒色粒子を含み、暗灰色・灰オリーブ色を呈し、焼成は良好。		2/3残存	灰原C-4、C-5 No.20、C-10、D-8・9・10	胎土が灰の飛散で付着
第27図	341	平瓶				18.5	体部。内外面横ナデ。中位～上半カキ目。	砂粒少量。角閃石・長石・白色粒子を少量含み、灰色を呈し、焼成は不良。		胴部1/3残存	灰原B-4・5、C-6、E-8	
第27図	342	平瓶					肩部付近カキ目。内外面横ナデ。	砂粒少量。黒色破裂痕・白色細砂を少量含み、灰色・黒色を呈し、焼成は良好。		体上部～底部一部残存	灰原D-9・10、E-8	外面に自然釉付着
第27図	343	壺	19.2			24.4	口頸部内外面横ナデ。体部外面横ナデ、内面同心円当具痕。	白色砂粒・赤色粒子を少量含み、赤褐色を呈し、焼成は不良。		1/2残存	灰原C-5・6、D-8、E-7・8・9・12	
第27図	344	壺	(18.0)				内外面横ナデ。	砂粒少量。白色粒子含み、淡青灰色を呈し、焼成はやや良。		口縁部1/8残存	灰原E-9	
第27図	345	壺	21.5				内外面横ナデ。	砂粒微量。暗灰色を呈し、焼成は良好。焼歪みあり。二次焼成。		口縁部～頸部	灰原E-9～12	
第27図	346	壺					頸部。内外面横ナデ。	砂粒少量。白色細砂・黒色破裂痕を少量含み、灰色を呈し、焼成は良好。		破片	灰原一括	外面に自然釉付着
第28図	347	壺				21.0	肩部4箇所円形浮文。内外面横ナデ。外面カキ目。底部ヘラ調整。	砂粒多量。暗灰色を呈し、焼成は良好。		口縁部1/4残存	灰原C-4	
第28図	348	壺				16.9	外面上半にヘラ削り調整、下半にカキ目。内面ナデ。	灰色粒子を含み、灰色・黒青色・緑灰色を呈し、焼成は良好。		胴部2/3残存	灰原B-6、C-9・10、D-7・8・9・12	外面に自然釉付着
第28図	349	壺				19.8	底部。内外面横ナデ。底部外面回転ヘラ削り。	白色砂粒微量、黒色破裂痕を含み、暗灰色を呈し、焼成は良好。		胴部1/2残存	灰原(トレンチ内)	外面に自然釉付着
第28図	350	壺				19.8	体部。内外面横ナデ。底部回転ヘラ削り。	砂粒多量。暗灰色を呈し、焼成は良好。		2/3残存、底部ほぼ完存	灰原C-5、D-10、E-8・9・10	内外面に自然釉付着
第28図	351	壺				11.6	外面にカキ目(4～5本/2cm)、沈線。内面に横ナデ、頸部内面に指圧痕。	石英・黒色粒子を含み、灰青色・灰白色・黒褐色・暗灰オリーブ色を呈し、焼成は良好。	肩部外面	胴部1/4残存、底部4/5残存	灰原C-4・6	外面に自然釉付着
第28図	352	壺				13.5	脚部。内外面横ナデ。	砂粒少量。灰色(器壁内部は茶褐色)を呈し、焼成はやや不良。		脚部ほぼ完存	灰原D-10、E-6～9	

表27 穂屋1号窯跡遺物観察表(17)

※表中の「蓋杯」は西分類(p69注1)の杯Hを示す。

図版 番号	遺物 番号	器種	大きさ(cm)				形態・整形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	ヘラ 記号	残存度	出土位置 遺構名等	備考
			口径	器高	底径 (脚部)	胴部 最大径						
第28図	353	壺			9.8		壺脚部。内外面横ナデ。 底部外面ナデ。	白色粒子を含み、外面は暗青灰色・青灰色、内面は淡青灰色を呈し、焼成は良好。		底部1/3残存	灰原C-8No.1	
第28図	354	壺			10.8		壺脚部。円孔をもつ。内外面横ナデ。	角閃石・白色粒子を含み、淡灰色を呈し、焼成は堅緻であるがやや不良。		1/4残存	灰原C-8	
第28図	355	壺			(10.4)		脚部に穿孔。内外面横ナデ。	砂粒少量。明灰色を呈し、焼成は良好。		脚部1/4残存	灰原D-9	穿孔あり
第28図	356	小形甕	10.6	17.5			体部に沈線。外面ハケ目、内面横ナデ。	砂粒少量。角閃石・長石を少量含み、灰黄白色を呈し、焼成はやや不良。		3/4残存	灰原C-5~8、E-10・11	
第28図	357	甕	11.9			17.7	外面ハケ目状工具によるタテ方向調整。内面ヘラ調整。	砂粒微量。淡黄色を呈し、焼成は不良。		2/3残存	灰原D-9、E-7	
第28図	358	壺	12.4			20.4	外面平行叩き・不定方向のナデ、内面同心円状当具痕。	砂粒少量。灰白色を呈し、焼成はやや不良。		2/3残存	灰原C-7、D-5・6・8・9、E・G-10	
第28図	359	壺	14.2			22.3	内外面横ナデ。	砂粒少量。黒色破裂痕を含み、暗灰色を呈し、焼成は良好。		口縁部1/3残存	灰原F-6	
第28図	360	壺					底部。内外面横ナデ。	砂粒少量。黒色破裂痕を含み、暗灰色を呈し、焼成は良好。		底部3/4残存	灰原E-6	外面に自然釉付着
第29図	361	甕	51.0				大形甕。外面平行叩き、頸部・口縁部内面に櫛描波状文。胴部内面同心円状当具痕。	砂粒少量。長石を少量含み、灰黄色を呈し、焼成は堅緻。		口縁部1/2残存	灰原B-5・6、C-5・6、D-6・8、E-8、F-7・8、G-8	
第29図	362	大甕	(56.0)				口頸部外面に櫛描波状文、内面に横ナデ。胴上部外面に平行叩き、内面に同心円状当具痕。	砂粒少量。角閃石を微量含み、灰色を呈し、焼成は良好。		口縁部~頸部片	灰原D-8・10	
第29図	363	甕	46.3				大形甕。外面に平行タタキ後、ナデ、頸部に2段の櫛描波状文。内面に同心円状当具痕、ナデ。	砂粒少量。長石含み、黒色粒子を多量に含み、灰色(口縁一部は黒灰色)を呈し、焼成はやや不良。		口縁部4/5残存	灰原D-10	
第30図	364	甕					口頸部。内外面横ナデ。外面櫛描波状文。	砂粒多量。長石を少量含み、灰白色を呈し、焼成は不良。		口縁部1/8残存	灰原D-8	
第30図	365	甕	26.0				内外面横ナデ。口頸部外面に櫛描波状文・刺突文。	砂粒少量。角閃石・長石・白色細砂を少量含み、灰色を呈し、焼成は良好。		口縁部1/4残存	灰原	
第30図	366	甕	46.3				口頸部に2段の施文帯に櫛描波状文。外面平行叩き。胴部内面同心円状当具痕。	砂粒少量。灰白色を呈し、焼成はやや不良。		口縁部~肩部1/5残存	灰原D-5・6、E-10	
第30図	367	甕	23.4				外面平行叩き。内面同心円状当具痕。	砂粒少量。長石を少量含み、明灰褐色を呈し、焼成は通有。		口縁部完存	灰原D-7	
第30図	368	甕	23.3				外面平行叩き後カキ目。内面同心円状当具痕。	砂粒少量。暗灰色を呈し、焼成は良好。		口縁部~胴部	灰原D-7~10	
第31図	369	甕	23.8				外面平行叩き、カキ目。内面同心円状当具痕。	砂粒少量。白色粒子を少量含み、暗灰色を呈し、焼成は良好。		口縁部ほぼ完形	灰原D-7	外面に自然釉付着
第31図	370	甕	12.8				外面平行叩き。内面同心円状当具痕。	砂粒少量。長石を少量含み、淡灰褐色を呈し、焼成は不良。焼歪みの為楕円形。		口縁部1/4残存	灰原D-6	
第31図	371	甕	21.5				外面平行叩き後、カキ目。胴部内面同心円状当具痕、ナデ。	砂粒精緻。明灰色を呈し、焼成は良好。		口縁部完形~頸部一部残存	灰原C-5・6、E-5	
第31図	372	甕	21.5				外面平行叩き。内面同心円状当具痕。	砂粒多量。長石を少量含み、明白色を呈し、焼成は良好。		口縁部3/4残存	灰原D-7	
第32図	373	蓋杯蓋	(11.0)				内外面横ナデ。天井部欠失のため、切離し技法不詳。	精緻。長石を含み、灰色を呈し、焼成は堅緻。		1/4残存	窯内周辺	
第32図	374	壺?			7.2		壺の高台と思われる。底部回転ヘラ切り。内外面横ナデ。	砂粒少量。長石を含み、暗褐色を呈し、焼成はやや不良。		底部1/3残存	窯内周辺	

表28 穂屋1号窯跡遺物観察表(18)

※表中の「蓋杯」は西分類(p69注1)の杯Hを示す。

図版 番号	遺物 番号	器種	大きさ(cm)				形態・整形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	へら 記号	残存度	出土位置	備 考
			口径	器高	底径 (脚部)	胴部 最大径					遺構名等	
第32図	375	壺?			(8.8)		壺の高台と思われる。底部 回転へら切り。内外面横 ナデ。	精緻。長石を含み、灰褐色を呈 し、焼成はやや不良。		底部破片	窯内周辺	
第32図	376	高杯					外面横ナデ。内面自然釉付 着により調整不詳。	精緻。灰褐色を呈し、焼成は堅 緻。		杯底部1/3残存	窯内周辺	内面全体 に自然釉 付着
第32図	377	短頸壺	(5.2)				内面横ナデ。	精緻。長石を含み、内面は黒褐 色、外面は灰褐色を呈し、焼成 は堅緻。		口縁部破片	窯内周辺	
第32図	378	壺					外面カキ目、ヨコナデ、 内面ヨコナデ。	精緻。長石を含み、青暗灰色を 呈し、焼成は堅緻。		肩部1/4残存	窯内周辺	
第32図	379	土師質 土器	14.6	3.9	10.9		外面摩耗のため調整不詳。 内面横方向ミガキ。	砂粒多量。角閃石・長石を含み、 淡黄色を呈し、焼成は良好。			灰原E-9	
第32図	380	土師器 甕				17.0	外面に斜方向のハケ目(6 本/cm単位)。内面に不整 方向のへらナデ。	砂粒多量。角閃石・長石・白色 粒子を含み、赤褐色～黄褐色を 呈し、焼成は良好。		1/4残存、 口縁部欠損	灰原B-4、 D-5・6	
第32図	381	平瓦					凹面布目痕、へら削り痕、 模骨痕。凸面木目直交の叩 き痕、へら調整。	砂粒多量。角閃石・長石細粒・ 白色粒子を含み、灰赤褐色～灰 色を呈し、焼成は良好。		1/4残存	灰原F-10	
第32図	382	平瓦					凹面布目痕、へら削り痕、 模骨痕。凸面木目直交の叩 き痕、へら調整。	砂粒多量。角閃石・長石・白色粒子 を多量に含み、灰色を呈し、焼成 は良好。二次被熱により黒変あり。		1/3残存	灰原D-9・ 10、F-11	

表29 穂屋2号窯跡遺物観察表(1)

穂屋2号窯跡

図版 番号	遺物 番号	器種	大きさ(cm)				形態・整形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	残存度	出土位置		備考
			口径	器高	底径 (脚部)	胴部 最大径				遺構 名等	層位	
第36図	1	杯蓋	11.3	2.3			低いつまみと内面に返りをもつ。内外面横ナデ。天井部回転ヘラ削り。	砂粒は少ない。白色粒子を含み、灰色を呈し、焼成は良好。	1/2残存	窯内 7区		
第36図	2	杯蓋	11.6				つまみを欠く。内外面横ナデ。	砂粒は少ない。黒色粒子・白色粒子を少し含み、暗灰色を呈し、焼成は良好。	口縁部1/4残存	窯内 7区	I次 床面 内	
第36図	3	杯蓋	11.9				返りを欠く。内外面横ナデ。天井部回転ヘラ削り。	砂粒は少ない。黒色粒子を含み、灰色を呈し、焼成はやや不良。焼歪み。	口縁部~1/4 残存	窯内		
第36図	4	杯蓋	12.2				つまみを欠く。内外面横ナデ。	堅緻。暗灰色を呈し、焼成は良好。	1/4残存	窯内		
第36図	5	杯蓋	(13.5)				つまみを欠く。内外面横ナデ。	砂粒は少ない。黒色粒子・白色粒子を少し含み、黒灰色を呈し、焼成は良好。	口縁部1/8残存	窯内		
第36図	6	杯蓋	(12.2)				つまみ、返りを欠く。内外面横ナデ。	堅緻。外面暗灰色、内面灰褐色を呈し、焼成は良好。	1/8残存	窯内 6区		
第36図	7	高台 付杯	12.0	5.3	(7.1)		内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。	砂粒は少ない。暗灰色を呈し、焼成は良好。焼歪み。	完形	窯内		
第36図	8	高台 付杯	12.4	5.2	(7.2)		内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。	砂粒は少ない。暗灰色を呈し、焼成は良好。焼歪み。	4/5残存	窯内		
第36図	9	高台 付杯	12.6	6.0	8.0		内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。	砂粒は少ない。暗灰色を呈し、焼成は良好。焼歪み。	完形	窯内		
第36図	10	高杯	12.7	(10.5)	9.6		内外面横ナデ。杯部下端回転ヘラ削り。	砂粒は少ない。暗灰色を呈し、焼成は良好。焼歪み。	口縁部1/4欠損	窯内		
第36図	11	高杯	12.4				杯部。内外面横ナデ。杯部下端回転ヘラ削り。脚部内面絞り痕。	砂粒は少ない。暗灰色を呈し、焼成は良好。焼歪み。	杯部1/2残存	窯内		
第36図	12	高杯	12.5				杯部。内外面横ナデ。	砂粒は多い。白色粒子・黒色粒子を多く含み、外面茶灰色、内面暗灰色を呈し、焼成は良好。	口縁部1/5残存	窯内 7区		
第36図	13	杯身	(14.1)				内外面横ナデ。	砂粒は少ない。黒色粒子を含み、灰色を呈し、焼成は良好。焼歪み。	口縁部~1/4 残存	窯内		
第36図	14	高杯			6.1		脚部。内外面横ナデ。	砂粒は少ない。暗灰色を呈し、焼成は良好。	脚部のみ完形	窯内		
第36図	15	高杯			7.4		脚部。内外面横ナデ。	砂粒は少ない。灰白色を呈し、焼成は不良。	脚部のみ完形	窯内		
第36図	16	高杯			8.1		脚部。内外面横ナデ。	砂粒は少ない。暗灰色を呈し、焼成は良好。	脚部のみ完形	窯内		
第36図	17	高杯			9.2		脚部。外面横ナデ。内面絞り痕。	砂粒は少ない。灰色を呈し、焼成は良好。	1/4残存	窯内 7区		
第36図	18	高杯			8.3		内外面横ナデ。	砂粒は少ない。灰白色を呈し、焼成は不良。	脚部のみ完形	窯内		
第36図	19	高杯			8.8		脚部。外面横ナデ。内面絞り痕。	砂粒は少ない。暗灰色を呈し、焼成は良好。焼歪み。	脚部完形	窯内		
第36図	20	高杯			8.0		内外面横ナデ。	砂粒は少ない。暗灰色を呈し、焼成は良好。	脚部のみ完形	窯内		
第36図	21	壺	(8.4)				内外面横ナデ。	砂粒は少ない。黒色粒子を含み、灰色を呈し、焼成は良好。	口縁部~1/4 残存	窯内		
第36図	22	壺	(8.8)				内外面横ナデ。	砂粒は少ない。黒色粒子を含み、灰色を呈し、焼成は良好。	口縁部~1/5 残存	窯内		

表30 穂屋2号窯跡遺物観察表(2)

図版 番号	遺物 番号	器種	大きさ(cm)				形態・整形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	残存度	出土位置		備考
			口径	器高	底径 (脚部)	胴部 最大径				遺構 名等	層位	
第36図	23	壺	(9.5)				内外面横ナデ。	砂粒は少ない。黒色粒子を含み、灰色を呈し、焼成は良好。	口縁部～1/3 残存	窯内		
第36図	24	壺	(11.3)				内外面横ナデ。	砂粒は少ない。黒色粒子を含み、灰色を呈し、焼成は良好。	口縁部～1/5 残存	窯内		
第36図	25	壺					口頸部。内外面横ナデ。	堅緻。灰色～黒灰色を呈し、焼成は堅緻。外面に自然釉付着。焼歪み顕著。	1/6残存	窯内		
第36図	26	壺					口頸部。内外面横ナデ。	堅緻。にぶい赤褐色を呈し、焼成はやや不良。	口縁部破片	窯内		
第36図	27	円面硯			(15.2)		脚部。窓は縦長長方形。内外面横ナデ、ナデ調整。	精緻。暗黄褐色～灰色を呈し、焼成はやや不良。	1/6残存	窯内		
第36図	28	甕				40.8	外面横・斜方向平行叩き。内面同心円当具痕。	砂粒は少ない。淡い灰色を呈し、焼成は不良。		窯内 6区		Ⅲ次 床面 直上
第37図	29	杯蓋	12.4	2.0			低平なつまみと内面に返りをもつ。内外面横ナデ。天井部回転ヘラ削り。	白色粒子を含み、精緻。外面灰黄色、内面暗灰黄色を呈し、焼成は不良。	1/2残存	窯内 2区		
第37図	30	杯蓋	12.7	2.3			低平なつまみと内面に返りをもつ。内面横ナデ。外面自然釉のため調整不詳。	白色粒子を含み、外面黒灰色、内面灰色を呈し、焼成は良好、外面全体に自然釉。	1/3残存	窯内		
第37図	31	杯蓋					つまみ。内外面横ナデ。天井部回転ヘラ削り。	砂粒は少ない。精緻。黒色粒子、白色粒子をわずかに含み、外面暗赤褐色、内面灰色、黒色を呈し、焼成は堅緻であるが不良。	つまみ～天井 部一部残存	窯内		
第37図	32	杯蓋					返りを欠く。内外面横ナデ。天井部回転ヘラ削り。	角閃石・黒色粒子を含み、外面灰褐色、内面茶褐色を呈し、焼成は堅緻であるが不良。		窯内 2区		
第37図	33	杯蓋	8.7				つまみを欠く。内外面横ナデ。天井部回転ヘラ削り。	砂粒は少ない。黒色粒子を少し含み、灰色～黒色を呈し、焼成は良好。	天井部～口縁 部にかけて 1/3残存	窯内 3区		
第37図	34	杯蓋	9.9				つまみを欠く。内外面横ナデ。天井部回転ヘラ削り。	白色粒子を含み、外面暗灰褐色～暗赤褐色、内面暗灰褐色を呈し、焼成はやや不良。外面天井部が赤変。	1/3残存	窯内 3区		
第37図	35	杯蓋	11.4				つまみを欠く。内外面横ナデ。天井部回転ヘラ削り。	石英を含み、外面暗灰黄色、内面灰黄色を呈し、焼成は不良。	1/3残存	窯内 2区		
第37図	36	杯蓋	12.1				つまみを欠く。内外面横ナデ。天井部回転ヘラ削り。	砂粒は少ない。黒色粒子・白色粒子を少し含み、灰色を呈し、焼成は良好。外面に灰釉あり。	天井部～口縁 部にかけて 1/4残存	窯内 1区		
第37図	37	杯蓋	13.0				つまみを欠く。内外面横ナデ。	砂粒は少ない。長石を少し含み、灰褐色を呈し、焼成は良好。	口縁部1/8 残存、底部 1/3残存	窯内 1区		
第37図	38	杯蓋	16.4				つまみを欠く。内外面横ナデ。天井部回転ヘラ削り。	白色粒子をわずかに含み、外面黄灰色、内面暗灰黄色を呈し、焼成は不良。	1/4残存	窯内 1区		
第37図	39	杯蓋					内外面横ナデ。	砂粒は少ない。黒色粒子を含み、灰色～淡黄色を呈し、焼成は不良。		窯内 4区		
第37図	40	杯蓋					内外面横ナデ。天井部自然釉のため調整不詳。	砂粒は少ない。黒色粒子を少し含み、灰色、淡黄褐色、黒色を呈し、焼成は良好。	天井部1/2残存	窯内		
第37図	41	杯身	13.4	3.8	(7.0)		内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒は多い。角閃石・長石を含み、淡白灰色を呈し、焼成は不良。	1/3残存	窯内 6区		
第37図	42	杯身	(12.4)	3.2	(8.0)		横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒は少ない。黒色粒子含み、灰色を呈し、焼成は良好。	口縁部1/8残存	窯内 2区		
第37図	43	杯身	12.6	3.5	(6.0)		内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒は多い。淡白灰色を呈し、焼成は不良。	1/2残存	窯内 6区		
第37図	44	高台 付杯	(10.2)	4.2	(7.0)		内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。	砂粒は少ない。長石を少し含み、外面黒色、内面暗灰色を呈し、焼成は堅緻。		窯内 3区		

表31 穂屋2号窯跡遺物観察表(3)

図版 番号	遺物 番号	器種	大きさ(cm)				形態・整形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	残存度	出土位置		備考
			口径	器高	底径 (脚部)	胴部 最大径				遺構 名等	層位	
第37図	45	高台 付杯			7.5		横ナデ。底部ナデ。	砂粒は少ない。黒色粒子を含み、淡灰褐色を呈し、焼成は良好。	口縁部1/3残存	窯内 2区		
第37図	46	高台 付杯			(9.8)		内外面横ナデ。	砂粒は少ない。長石を少し含み、黒灰色を呈し、焼成は堅緻。内外面に自然釉。		窯内 6区-2		
第37図	47	高台 付杯			7.5		横ナデ。底部外面自然釉のため調整不詳。	砂粒は少ない。黒色粒子を含み、黒灰色を呈し、焼成は良好。外面に自然釉付着。	底部1/2残存	窯内 2区		
第37図	48	高杯	13.2	7.2	8.2		内外面横ナデ。脚部内面縦方向のナデ。	砂粒は少ない。角閃石・長石を少し含み、黄灰色を呈し、焼成は不良。	2/3残存	窯内 3区		
第37図	49	高杯			10.6		外面横ナデ。内面絞り痕。	砂粒は少ない。灰褐色を呈し、焼成は堅緻。		窯内 2区		
第37図	50	高杯			(11.0)		外面横ナデ。内面ナデ調整。	砂粒は少ない。暗青灰色を呈し、焼成は堅緻。		窯内 6区		
第37図	51	皿	(24.5)	1.6	(20.0)		内外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒は少ない。白色粒子を含み、外面淡黄灰色、内面暗灰色～薄灰色を呈し、焼成はやや良好。焼歪み。		窯内 2区		
第37図	52	鉢	(22.8)				内外面横ナデ。外面ヘラ調整。	砂粒は少ない。黒色粒子を含み、外面黄灰色、内面灰色を呈し、焼成は良好。	口縁部～胴部 までの破片	窯跡 周辺		
第37図	53	鉢					内外面横ナデ。	砂粒は少ない。白色粒子・黒色粒子を含み、赤褐色～灰色を呈し、焼成は不良。		窯跡 周辺		
第37図	54	杯?					外面櫛描波状文。	砂粒は少ない。黒色粒子・白色粒子を少し含み、暗赤褐色、淡黄褐色、黒色、灰白色を呈し、焼成は不良。	口縁部～体部 一部残存	窯内		
第37図	55	鉢?					内外面横ナデ。	砂粒は少ない。精緻。暗灰色を呈し、焼成は良好。	口縁部一部 残存	窯内		
第37図	56	ハソウ	(11.8)				内外面横ナデ。	砂粒は少ない。黒色粒子を含み、黒灰色～灰色を呈し、焼成は良好、焼歪み。溶着物付着。	口縁部破片	窯内		
第37図	57	壺					内外面横ナデ。口頸部外面櫛描波状文。	砂粒は少ない。角閃石をわずか、白色粒子を少し含み、暗灰色を呈し、焼成は良好。	口縁部破片	窯内		
第37図	58	壺			(17.6)		内外面横ナデ。肩部カキ目。	砂粒は少ない。黒色粒子を含み、外面黄灰色、内面灰白色を呈し、焼成は不良。	頸部～肩部 までの破片	窯内 3区		
第38図	59	壺	17.6				内外面横ナデ。	砂粒は少ない。黒色粒子・茶褐色粒子を含み、灰色を呈し、焼成は良好。	口縁部1/3残存	灰原 範囲		
第38図	60	壺	19.0				内外面横ナデ。	砂粒は少ない。黒色粒子を少し、角閃石・赤色粒子・白色粒子をわずかに含み、にぶい黄橙色を呈す。焼成不良。	口縁部1/2残存	窯内 1区		
第38図	61	壺			(10.4)		内外面横ナデ。外面自然釉のため調整不詳。底部回転ヘラ削り。	砂粒は少ない。黒色粒子を含み、外面灰色、内面灰白色を呈し、焼成は不良。外面に自然釉。	底部破片	窯内		
第38図	62	甕	22.6				内外面横ナデ。	砂粒は少ない。白色粒子を少し、長石をわずかに含み、外面灰褐色～暗茶褐色、内面灰褐色を呈し、焼成は不良。	口縁部1/4残存	窯内 2区		
第38図	63	甕	(26.0)				内外面横ナデ。	砂粒は少ない。白色粒子を少し、長石をわずかに含み、外面黒灰色～灰白色、内面灰褐色を呈し、焼成は堅緻。	口縁部1/5残存	灰原 範囲		
第38図	64	甕					内外面横ナデ。口縁部外面に沈線。頸部外面に櫛描波状文。	砂粒は少ない。角閃石・長石を少し含み、暗灰色を呈し、焼成は良好。	口縁部破片	窯内 6区		
第38図	65	硯			(16.8)		内外面横ナデ。	砂粒は少ない。白色粒子を含み、灰色を呈し、焼成は良好。	脚部1/5残存	窯内 1区		
第38図	66	杯蓋					つまみ。ナデ。天井部回転ヘラ削り。	砂粒は少ない。黒色粒子を少し含み、灰色を呈し、焼成は良好。	つまみ～天井 部一部残存	窯内 2区		

表32 穂屋2号窯跡遺物観察表(4)

図版 番号	遺物 番号	器種	大きさ(cm)				形態・整形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	残存度	出土位置		備考
			口径	器高	底径 (脚部)	胴部 最大径				遺構 名等	層位	
第38図	67	瓦質 土器					内外面横ナデ。	砂粒は少ない。長石を少し含み、赤褐色を呈し、焼成は良好。	口縁部破片	窯内 3区		
第38図	68	平瓦					凸面平行叩き。凹面糸切り痕、布目。	砂粒少ない。黒色粒子多く、黄褐色を呈し、焼成は良好。		窯内		
第38図	69	平瓦					凸面木目直交平行叩き。凹面糸切り痕、布目。	砂粒少ない。白色粒含み、暗灰色を呈し、焼成は良。		窯内		
第38図	70	平瓦					凸面木目直交平行叩き。凹面糸切り痕、模骨、布目。ヘラ調整。	砂粒少ない。白色粒子少なく、黒灰色を呈し、焼成は良好。		窯内		
第38図	71	平瓦					凹面布目痕、模骨痕。凸面平行叩き痕。側面ヘラケズリ後ナデ。	砂粒少ない。黒色粒子を含み、黄灰色を呈し、焼成は不良。	平瓦の狭端部片全体1/5残存	窯内 2区		
第39図	72	平瓦					凸面平行叩き。凹面糸切り痕、模骨、布目。ヘラ調整。	砂粒少ない。角閃石・長石が多く、灰色を呈し、焼成は良好。		窯内 7区		
第39図	73	平瓦					凹面布目痕後一部ナデ。凸面平行叩き痕。側面ヘラケズリ後ナデ。	砂粒多い。茶褐色粒子・白色粒子・黒色粒子を含み、橙色を呈し、焼成は不良。	平瓦の広端部片全体1/4残存	窯内 1区		
第39図	74	丸瓦					凸面平行叩き。凹面布目、痕ヘラ調整。	砂粒は少ない。黄灰褐色を呈し焼成不良。		窯内 5区		
第39図	75	丸瓦					凸面平行叩き。凹面布目。ヘラ調整。	砂粒は微量。内面暗灰色を呈し、焼成は堅緻で良好。				